

史料 水戸藩中山氏石炭御用留

日立市の歴史点描編

史料について

本書には、水戸藩附家老中山氏の支配地である常陸国多賀郡北部、通称松岡領で産出される石炭にかかわる中山氏の記録である「石炭御用留」を収めた。

この御用留は(1)慶応二年(一八六六)十一月から翌三年十二月までと(2)慶応四年正月から三月までの二冊からなる。

慶応二年十一月、中山氏領に埋蔵される石炭が幕府「軍艦方」に求められた。以後、採炭から納品までが中山氏の管理下に置かれ、それら記録及び関連文書を書き留めたものがこの御用留である。

書き留めたのは、在地の松岡において財政を分掌する「吟味所掛り」である。

原本は、現在茨城県立歴史館が所蔵する松岡中山家中高橋キヨ家文書中にある。

なお、慶応二年(一八六六)十一月から翌三年十二月までの一冊は、『北茨城市史 別巻3 石炭史料1』に翻刻されており、今回の翻刻にあたり参照した。

凡例

一 史料の収録にあたり、原本の形式や表記法を残すようつとめたが、編さんの必要上と読者の便宜をはかるため、原本の意味を損じないかぎり、次のように取り扱った。

- (1) 適宜、読点・並列点をふした。
- (2) 漢字は常用漢字を用いたが、正字と意味が異なる場合、正字をそのまま残した。
- (3) 仮名については、片仮名はそのままと

し、変体仮名はすべて平仮名に改めた。ただし、助詞の「者」「而」「茂」「江」「与」や「而已」等の変体仮名は、原則として小活字の漢字で示した。

- (4) 合字の方(より)はそのままとした。
- (5) 繰返し記号は、原本の表記に基づいて、「々」(漢字)、「丿」(平仮名)、「丿」(片仮名)、「く」(二文字以上)とした。

- (6) 意味の通じるあて字は原本のままとした。
- 二 使用した符号はつぎのとおり。

() 編者が補足、訂正、注記したもの。
□ 虫損、破損により判読不能なところ。
字数を推定できないときは「 」とした。

- 三 誤字は原則として右傍の()に正字を示し、十分判読できないときは(ママ)と註記した。また傍註に(カ)としたものは断定をひかえたものである。

- 四 敬礼のための平出・台頭は二字空欠とし、同じく闕字は一字空欠とした。

目次

慶応二年十一月〜慶応三年十二月

水戸藩中山氏石炭御用留

2

慶応四年正月〜三月

水戸藩中山氏石炭御用留

28

〈参考〉

元治二年正月

蒸気御船遣石炭掘取方其外見
込之趣取調申上候書付

28

慶応二年十一月〜三年十二月 水戸藩中山氏石炭御用留

(茨城県立歴史館蔵 高橋キヨ家「三」 竖帳)

〔表紙〕

慶応二年

石炭御用留

丙寅 松岡

十一月 吟味所掛り

(慶応二年)

一 昨年(慶応元年)方御領中石炭為御堀御益筋ニ相成候様御目論見被仰出、先ツ木皿村郷士柴田早之助江兼而内願之趣も有之候間、試ミ堀被 仰付、当春方大塚村西明寺山之内石炭有所御渡シ、同人方ニて仕事師抱置為堀出候事

一 石炭之儀請負・買入・捌人無之、是迄堀出シ積置候処、右者 公辺御軍艦方御用分ニ御買上、商人之手江不相渡 御家方直納ニ相成候様江戸表ニて御扱ニ相成候間、老ケ月何俵、一ケ年ニ何俵位無相違出来候と申儀ヲ為書出候様松村殿方御達ニ付、柴田早之助江相達置候事

十一月廿五日

一 先日相達置候石炭出来方俵数書付左之通指出候間、石炭御用掛り松村平大夫殿江指出候事

覚

一 石炭老万八千俵
但シ老ケ月二千五百俵ツ、

右者 御領分ニ有之候石炭、老ケ月老ケ年之堀出シ高御尋ニ付、大図相積り前書之通り書付奉指上候、依而如件

慶応二年

寅十一月

柴田早之助

寅十二月九日

一 石炭之儀ニ付江戸表方御内状ニ而運有之候間、別紙内状之趣相心得宜敷取扱候様松村平大夫殿方御達有之候事

略文写

一 石炭百俵程御指登セニ致度段先便御運申候処、御承知則御答も被御申聞候処、右者此度善衛門より此吟味役江相運ニ者柴田早之助手ニ而堀取置候石炭三百俵御指登セ之御手筈ニ而、最早船迄者積立候得とも、此表何れ之向江送り可然哉之旨申越候由久兵衛方申出有之候、然ル処追々御運申候通、此度之儀ハ全ク御軍艦所ニて御試ミのため見本ニさし出候様御軍艦所役所方申聞有之候儀ニ付、先ツ百俵も御廻させ御座候様御取扱ニ致度、尤右御軍艦所頭取鈴木哲之助殿内々申聞候振も御座候へハ、去ル廿五日同人宅江新衛門事罷越手続も有之候儀ニ付、右御役所江直ニ指出御買上ケニ相成候様致度旨申談候処、委細引受御せ話可申上、併石炭之儀者当時諸国方出產、向々方願出も有之候得共、先ツハ下品ニ而御用ニ足り不申候、依而者御領知之品式拾俵敷三拾俵御試のため御献上被成、其上御様シ相成、弥上品ニ候ハ、何程ニ而も御買上可相成候間、右御献納之御願御指出被成候様ニと申聞候事ニ□、右ニ付而ハ前書百俵程ハ早々御廻シニ相成候様致度候、右着船之上御願立之手筈ニ致置候、くれ〱早様為御指登可被成候、尤此表深川信濃屋和助と申もの、河岸江向ケ積送候様御達ニ致度御座候、万御様シ之上御用ニ不相立候節ハ、式拾俵なり三拾俵なり御上納損ニ御座候得共、多分者成就可致共被存候、右等も御見込宜

御取扱ニ致度候、此段得御意候、以上

十一月廿九日

平大夫様

新衛門

六郎衛門

尚々可成丈ケ上品を為御撰為指登候様御達ニ致度候、以上

十二月十日

一 右御達之趣掛り小林溪蔵江申聞□早速柴田早之助江為相達候事

十二月十四日

一 昨十三日夜、江戸詰之小林儀一郎本新組五人下着ニ御運成候旨ニ而松村平大夫殿方御達、御内状趣ヲ以猶宜敷取扱候様御達有之候事

御内状略写

一 前書石炭御軍艦所江御願出之儀追々手続キも有之、殊ニ此節御用品多分御座候由旁幸之儀ニ付、同所頭取相勤候鈴木哲之助方江申談、尤右段者先便御運申置候ニ付今程者御承知之事と存候、右哲之助方内々指図も有之 御献納之品参着前ニ而も御願立ニ相成候方可然旨被申聞、旁能図ニ有之候間、今朝御軍艦所役所江御留守居ヲ以別紙之通御願書御指出ニ相成候処、同所同心組頭荒井稻次郎と申もの取次ニ而慥ニ落手いたし候、早速奉行江相達近々御指図御座候趣ニ答有之候、右請取方手段等至極宜敷候間多分者御願済御買上ケニ相成候事と奉存候、就而ハ追々御運申候通少々も早舟為御指登之儀精々御達御座候様致度申迄も無之、右様之儀ハその度ヲはつし候而者御出来ニ相成候儀も不成就ニ相成候姿、くれ〱早々御廻させニ致度、いか敷儀を得御意候様ニハ候得とも今に着船無之、此表ニおゐてハ日々心配相待候間、此度之御答江者幾日濱下ケ大凡幾日頃

此表江参着と申見込迄申出候様御達ニ致度、定而積出より此表之運送等諸雜費之儀等にて御取扱方御因循ニも可有之候得とも、初発者御払損位之御見通ニ而御取扱ニ而ハいか御座候哉、弥御買上と相成場合ニ至候ハ、此表ニ而いくらも金主ハ御座候間、右等之処ハ御察返ス／＼も早行御廻させニ相成候様致度候、此段得御意候、以上

十二月九日 御用 平大夫様 新衛門 六郎衛門

御願書之写

備中守領分常州多賀郡松岡内山付之村々方石炭多数出産御座候処、右者当節御軍艦御手当 御用多分ニ御座候由、在所近郷小豆畑村等為御堀取ニ相成候儀在所表方申越候、就而ハ右領内方出産有之候石炭之儀ニ御座候間、相当之直段を以御買上ケ被下度、尤為御試數十五俵献納^{（前）}仕度御聞濟ニ相成候ハ、早速在所表江申達、品着次第献上可仕候、右御様シ之上 御用ニも可相成品ニ御座候ハ、員数被 仰聞次第其筋江堀取方精々可申付候、此段奉願候、以上

御名家来

十二月十九日

一 別紙之通り今朝着水三方之宿繼便にて申来候間、猶宜敷相達候様御達有之候事

一 石炭御買上御願ニ付御試のため拾五俵献納御願御指出ニ相成候段ハ、先使小林儀一郎等指下候節右御願書之写相添得御意候間、定而今程御承知夫々御廻シ方等御取扱ニ相成候事と奉存候、昨十四日御軍艦奉行衆方御呼出シ申参候ニ付、御留

守居御軍艦所江罷出候処、先日御指出ニ相成候御願書江別紙之通り御付札ニ而御指図御座候間、則御廻シ申候、委細者右にて御承知猶早々石炭御指登セ之儀宜御達ニ致度候、尤当春中新衛門其表江罷下候節持参致候石炭全ク之見本小箱入忝箱指出候所、掛り之者ニ聞候得ハ随分上品ニ有之候旨九分ハ御買上ニ可相成、併弥御買上ニ相成候上万一下品を御納ニ相成候様ニ而ハ直様御断ニ可相成儀ニ付、兎角品を御吟味之上御納被成候様にとくれ被申聞候趣御留守居より申出候、右様御承知品相撰候様精々御達ニ致度候、別紙相添此段得御意候、以上

新衛門 六郎衛門

十二月十四日 平大夫様

御下ケ札写

書面石炭献納之儀者相止メ、差向拾五俵丈ケ相当之直段を以御買上ケ之上焚試、弥御用可相成品ニ候ハ、尚追々御買上取計候間、先ツ拾五俵早々可被差出候事

右之趣小林溪藏江相達、柴田早之助江早々積立候様、猶又此度積立之上品見本少々指出候様為申越候事

十二月廿二日

一 先日相達置候通り船相雇積立候段、柴田早之助方使ヲ以左之通り申出候事

別紙之通り船相雇、昨日昼時迄ニ積送り早速出帆ニ相成申候間、此段以書付御届ケ申上候、以上

寅十二月廿一日 柴田早之助 送り状之事 滝吉丸 沖船頭吉四郎

松葉印付 一 石炭七拾八俵 此分極上撰品之由申出候 墨墨印付 一同 式拾式俵 此分並上品之由申出候 一 石炭百俵 但シ三俵ニ而忝石目積り

石 三拾三石三斗三升目 但シ百石目ニ付運賃金貳拾八兩貳分割 此運賃金九兩貳分也 前金三兩也 積立所にて用立 残金六兩貳分也 外浦賀方江戸迄艘下賃荷主持

江戸牛込 中山様御屋敷御用分

右者松岡附大塚山出石炭前書之通積送申候条、御地着改被成候上前書運賃殘金船頭江御渡可被下候、但海上之儀者可為御法候、送状依而如件

慶応二年寅十二月廿日 常州磯原 野口彦六

江戸深川東平野町信濃屋和助殿揚

十二月廿四日

一 前書之通り積出候処折悪く海上不宜、川尻沖迄参り掛り船ニ相成居候得とも次第第二荒立、廿二日夜ニ至り大高浪ニ相成破船致シ、乗込之者三人溺死、積荷不殘海中捨りニ相成候趣柴田早之助方使ヲ以申来候間、則其段松村平大夫殿江申立、今日仕出シ江戸表江御運ニ相成候事

（慶応三年） 卯正月三日

一 寅十二月晦日、江戸表より左之通り御運有之候間、宜取扱候様松村平大夫殿方御達有之候事

御用状写

一 石炭御納方之儀追々御運申候通り之手続キニ有之候間、着船次第数拾五俵指出シ、御買上にて御焼試之上弥御買上ケニも相成候ハ、公辺御役人等御贈物其外諸費等ハ勿論破船等を見込御任セニ相成候得ハ、正味拾六貫目入老俵磯原濱ニ而品引渡代金と引替ニ被成下候得ハ代銀七匁五分ニ而御引受申上、且江戸迄御手船ニ而御廻シ、此表ニ而御引受申候得ハ代拾七匁ニ而頂戴仕度、都而一式御受負申上度旨深川東平野町家持信濃屋和助方願申出候、尤願之通り御済セ被成下候ハ、御益金之儀ハ老俵ニ付銀老匁五分ツ、上納可仕候間、何卒願之通為御済被成下候様仕度旨申出候処、右者此表ニ而ハ不相分儀ニ付、何れ其表江御運申候上挨拶可致旨相答置申候 公辺御役人江御贈もの其外難船迄も見込御任セニ相成候而磯原濱渡シ之方御済セニ而ハいかゞ御座候哉、御勘考之上夫々江御達御調させ之上否後便被御申聞候様致度候、且右磯原濱渡者勿論此表迄御手船ニ而御廻シ両様之うちニ御済セニ相成候ハ、其表ニ而堀取方請負候者、譬ハ柴田早之助之類是ハ 御国恩として山錢五分敷三分ハ御益ニ上納致候儀ハ世上通例ニ有之候哉ニ御坐候間、右等も御差含宜敷御取扱ニ致度候、此段得御意候、以上

十二月廿六日 平大夫様

新衛門
六郎衛門

一 右之通り御達ニ付小林溪蔵江相達、柴田早之助当節堀取居候所之諸掛り取調させ、且同人計り之申出ニ而ハ実正之掛り相分り兼候間内々探索致し、上手綱能仁寺持分之山方当時堀出居候由故、此方之諸掛り早

之助之申出と違も可有之間、宜取調指出候様申聞置候事

右相達置候ニ付、調書付左之通り式通小林溪蔵より指出候間、松村平大夫殿江卯正月十二日指出候事

覚

一 五分

御益
村益

此分餘り少分ニ付役所下ケ札ニ而追而駢与取極メ可申旨申立置候事

一 老匁

堀賃

一 老匁 縄俵

一 式匁

駄賃錢

一 五分 会所掛り

一 五分

積掛り

一 五匁五分

前書之通り諸入用山出方磯原河岸積入迄相掛り申候、此外江戸迄之運賃相定り無之候、右之段書付奉指上候、以上

慶応三年卯正月

柴田早之助

覚

一 鐐八拾文

堀賃

一 同三拾八文 菰老枚

但シ老俵ニ付

一 同式拾文

縄代

一 同百八拾四文

但シ一尋老文ツ、

川岸下ケ駄ちん

但シ老俵ニ付

一 鐐三百三拾文

外ニ石炭山新開キニ候得ハ土方師并地代

堀立世話方之者諸入用ハ右俵数江割付ニ成ル

但シ石炭老俵ニ付

鐐三拾四五文位之見込

高戸・磯原河岸掛り

老俵ニ付四拾式文

惣一 鐐四百拾文 上り

右者上手綱村能仁寺持分之山方当節紀州様御用御買上分ニ、江戸深川ニ受負人有之、堀取居候諸掛り大岡小林溪蔵より内探索書付指出候分

卯正月十一日 水戸方宿繼ニ而相廻り候御内状御下ケ宜取扱候様松村平大夫殿方御達有之候事

御内状写

御書添令拝見候、御本文御認後高橋善衛門方申出候ハ、石炭既ニ磯原濱出帆ニ罷成候所、いつれ之辺ニ候哉旧臘廿三日朝破船ニおよひ、且乗組之内三人溺死いたし候と相見、未相見へ不申候由、誠ニ以御当惑之儀、右ニ付而ハ跡積送り之儀ハ延引ニおよひ可申旨申出候間、旁御指支被成候由、其前も水戸廻り御城米会瀬沖にて難船ニ及候由、尤俵物ハ不残上り候事ニ御座候所、昨年ハ兎角海上不宣事と相見、漁業等ハ大不漁之由ニ御聞及之旨委細致承知候、扱々御同意当惑、即前頭之始末不取敢旧臘晦日御留守居方御軍艦方江御届ケ為指出候事ニ御座候、然ル処其節も取扱候荒井と申仁方申聞ニも、海上之儀無扱次第ニ候得共、少しも早様御納ニ致度可相成ハ拾俵程馬之背ニ而なりとも為御送ニ者相成間敷哉と申聞も御座候由、箱入杯ニ致シ為御登之事ニ者相成間敷哉及御相談、若左様ニも相成候ハ、拾俵丈ケニ而宜候間速ニ為御登ニ致度、御相談御答旁此段得御意候、以上

正月六日 平大夫様

新衛門
六郎衛門

前書御達ニ付十二日付書状ヲ以同日柴田早之助江善衛門方申越候処、左之通り十三日朝申来候事

昨夕御達之趣委細承知仕候、跡積出之儀ハ旧冬中方東海丸と申船平潟ニ而相雇置候得とも日和無之候ニ付、最早日和も宜候間今日磯原方平潟迄罷出積立之儀精々仕、否可申上候間此段御答奉申上候、以上

正月十三日

柴田早之助

正月廿二日出仕

一 明廿三日、石炭拾俵分箱拾四二入、江戸詰新組文助・三之助・半七才料馬七駄、軽尻賃錢相渡、為御登二相成候事

但シ柴田早之助が昨廿一日馬五疋二而附送り、下馬ニて小林溪藏立合箱入二致シ、御臺所宛夫々為荷作候事

正月廿八日

一 江戸表方松岡屋栄吉と申者石炭之御世話申上度兼而江戸御屋敷江申出有之、則今日岡本久兵衛方之書状持参ニて下着、高橋善衛門宅江参り申出二付、松村平大夫殿江も其段申立候事

二月朔日

一 右栄吉、木皿村江参り石炭山見分之上、柴田早之助江委細引受方直段等相談として夜二入善衛門宅江右両人参候事

二月二日

一 右栄吉江御酒被下二而も可有之所、魚類も無之ニ付、代料ニて金三百疋被下二取扱候様松村平大夫殿方御達ニ候間、国分左大夫殿江も其旨相同、則御勘定役方受取、小林溪藏立合被下二相渡候事

但シ栄吉儀、明三日出立、江戸表江罷歸候趣ニ付、善衛門方岡本久兵衛江返書指出候事

二月十九日

一 夜五ツ時前、水三方宿継ニ而相廻候旨ニ而国分左大夫殿方御下ケニ相成候事

但シ松村平大夫殿隠居被仰付候ニ付、国分左大夫殿石炭御用掛り被仰付候旨御達御座候事

覚

撰抜

一 石炭

壹俵ニ付
但 正味百斤入
代銀貳拾壹匁也

右者領内多賀郡松岡方出産之品兼々御買上之儀奉願候処、先般御聞濟之上為御試見本百斤入拾五俵差出候様被仰渡候ニ付、去ル正月廿九日御役所江八俵相納候処、右石炭御様シ之上相応之品ニも御座候ハ、前書之直段を以御買入被下度、且御注文員数被仰聞可被下候、早速在所表江申越運送取急キ着次第上納可仕候、以上

二月七日
中山備中守家来
齋田善吾

御付札

書面之趣者海軍所着之上品柄見分之上ニ而壹寸式分目篩立之上、百斤入壹俵ニ付代銀貳拾壹匁之当を以御買上取計可申候之間、壹万俵急速江戸表江廻漕候様可被致候事

二月廿三日

一 石炭上品撰等見分として、小林溪藏同道高橋善衛門罷出、石岡村観音柵と申場所大塚吉次郎案内ニ而為堀見候処、此所ニも随分上品有之様ニ相分候得とも場所狭之様ニ相見候、夫が大塚西明寺下柴田早之助堀居候処江廻り見分致候所、最早貳千俵も堀出シ有之候故、此分者跡江相廻シ此度納之品極吟味撰品ニ而急速初積口ニ出来候様相達、磯原濱下ケニ相成居候分見分之上帰宅致候事

一 磯原濱下ケ石炭積入蔵塞り居、前件上品急速濱下ケニ致候而も置所無之、外江置候而ハ雨当り不宜候間、家根付小家掛ケニ而も当分之内出来夫江下ケ積候様致度旨柴田早之助申出二付、其段御用部屋江も申立、柱木御立山内方松木ニ而御渡シニ相成候様御郡方江申談

シ、小林溪藏江相達候事

但シ板・たる木者柴田早之助より指出、人足賃等者舟庄屋持前之事

(貼紙)
一 卯二月廿六日

江戸表信濃屋和助と申者方石炭請負金百両江戸御屋敷相納為替為御登せ相成候ニ付、此表御才覚金ヲ以今日柴田早之助へ相渡候事

三月六日

一 昼八ツ時頃水三方宿継ニ而江戸御用状相廻り左之通申来候事

前文略

一 石炭之儀先便も御連申候通、御軍艦所ニ而壹万俵御買上相成候趣ニ而急速相納候様御達ニ付、追々得貴意候通り御軍艦所御船ニ而積取方之儀御願立ニも可相成之御積りニ御坐候処、差懸り壹艘位者廻船御用達加納治郎作江御頼入候得者不取敢之所承知可致栄吉等申出候ニ付、右之取扱方同人江申付、早速取計候様申聞候ニ付、栄吉廻船方加納江相談候由之処、此節諸船一統ニ運賃直上之談合ニ而既ニ加納治郎作扱之御用船之儀も運賃百石ニ付是迄四拾兩之処金五拾兩之願指出候よし、其上石炭貳俵半ニ而壹石目之振ニ是又相願候与申事ニ付、右者迎も願之通り二者相済申間敷事ニ候得とも、願之趣何れ与歟御達ニ不相成候内者 御家計之石炭運賃只今は迄之定運賃ニ而積送り候様ニも難相成義ニ付、加納方ニ而も指支之趣栄吉申出ニ御座候、就而ハ追々延引ニ相成候間、其表ニ而平潟之尼屋船手船も有之候由、且此

表江尻船茂同所ニ者御座候半ニ付、夫等を御頼御積立之様致度趣、其内信濃屋和助手代之内ニ而事馴れ候者を老人指下シ、右船之儀も為取扱可申旨同人申聞ニ御座候、当節方三月十五日方迄者海上不宜時節之由、同日過ニ者戻り船等江御積立ニも相成可申候間、只今之時早々御運被下候様仕度旨同人願出ニ御座候、何れ此両御家老衆方も御運ニ相成可申候間、猶委敷者其表御達ニ而御承知可被下候、右之趣昨夜五ツ時過榮吉・久兵衛宅江罷出申聞ニ御座候間、不取敢此段得責意度如斯ニ御座候、以上

二月廿四日 江戸 兩人

前書文通之通り申来候間、国分左大夫殿江其段申立運之面ヲ以宜取計候様御達ニ付、早速平湯安満屋等船有之方江頼付候様可致旨柴田早之助江小林溪藏方為相達、且小林溪藏儀も間次第平湯安満屋江罷越、船相頼候様申付候事

但シ磯原・高戸船庄屋江御用石炭積出シニ不相成候内者一切協合之石炭積立無用之儀、堅被相留候事

三月七日

一 石岡村観音冊と申所之石炭、先達善衛門・溪藏等罷越見分候処、極上品之様ニ見受ケ候故、此分 御手座仕候而右堀出シ等世話方居村大塚吉次郎江被 仰付候ハ御益も多分ニ可相成旨国分左大夫殿江伺申立候処、吉次郎さへ迷惑ニも不相成、且弥上品沢山ニも出候模様ニも候ハ、通り可然旨御達ニ付、早速大塚吉次郎（殿）小林溪藏方文通為呼出候事

同八日

一 前書之儀ニ付大塚吉次郎罷出、小林溪藏同道善衛門宅江参候間、委細右之段申聞候処、御国恩之儀、且

御奉公何ニ而も相背キ候儀無御座候故、譬少々之損毛ニ罷成候とも一切厭無之御受ケ可仕旨申出ニ付、其段国分左大夫殿江申立候所、御産物之儀ニ付善衛門方直段申付候て宜敷候間碇与申付候様御達ニ付、則観音冊御手産石炭試堀世話方被 仰付候旨吉次郎江申達候事

但シ弥上品沢山ニ而随分御益ニも相成候ハ、其 御益ニ方世話料ニ相当り候様可被下旨申達候事

右吉次郎江石炭御手産世話方被仰付候間、近所之儀ニ付相互ニ心ヲ付必故障ケ間敷事抔申合無之様、屹与相心得候様柴田早之助江も為相達候事

三月十三日

一 小林溪藏平湯安満屋半兵衛江罷越、石炭積運送船相頼候処、此節江戸登り船更ニ入津無之候得とも不遠入津ニも可相成候間 御家様之儀且 公辺御納御用御品之儀ニ付、無御疎略屹与船頭江申談為積指上可申旨請合候旨申出候間、其段御用部屋江も申立置候事

三月十七日

一 石炭御益高之儀江戸表より運有之候得とも不分り之儀有之間、御益割書付ニて指出候様国分左大夫殿御達ニ付、左之通書付指出候事

覚

一 石炭老俵 正味拾六貫目入

但シ粉減見込拾七貫目宛ニ
元方仕立ニ御座候事

濱渡シニ而右老俵代銀七匁五分ニ信濃屋買受候約定

一 石炭老俵ニ付銀五分

御益として柴田早之助方上納之定

外ニ信濃屋和助方も老俵ニ付銀老匁五分御益として上納可仕振りニ江戸表江申上候由、左

様ニ御座候得ハ石炭老俵ニ付全ク銀式匁之御益ニ罷成候事

公辺納石炭老俵代銀式拾匁御買上ニ付

元掛り銀七匁五分 石炭老俵濱渡シニ而買上代

銀八匁 石炭老俵運賃積り

銀老匁五分 御益として上納分

銀拾七匁引 信濃屋和助之設ケ
残銀四匁也

元掛り銀五匁五分 御益分組入諸掛り引

銀七匁五分ニ而濱渡ニ売渡シ

指引残銀式匁也 柴田早之助設ケ

右之通りニ御座候、以上

卯三月十七日 高橋善衛門

三月十七日

一 江戸表方松岡屋栄吉下着、八ツ半時頃善衛門江参り申出候ハ、此度水戸迄商用向有之罷下候ニ付、江戸御上屋敷江去ル十日罷出候処、幸信濃屋手代老人可下振り之処ニ付、罷下候ハ、松岡江相廻り石炭船積方等之儀も得与可申出旨被 仰付候ニ付、実者岩城壁屋迄罷越候用向ニ付、戻り之節此 御屋敷江参上之積リニ而昨十六日平湯迄罷越、先ッ船有無頼方等間柄共江も相談仕候所、此節更ニ登り船無之、殊ニ石炭者船頭共嫌候て中々頼付難キ事御座候由、依而者先ッ高戸船ニて銚子迄老艘為御積、夫方内川為登ニ被成下候様仕度、将又段々承り候へハ、高戸船ハ小船ニハ候得とも江戸迄大廻シニも相成候処、一体小船ニ而ハ諸掛り負ケ仕引合不申、夫故大廻シハ不相成と申事之由ニ承り候間、右江戸表之諸掛り之所者信濃屋方ニて格別ニ働キ、諸掛りハ引受候様ニも致候間、成ル丈ケ老艘者大

廻シ之積リニ為登ニ被 仰付被下候様仕度との申出ニ付、其段国分左大夫殿江申立相伺候所、船庄屋呼寄セ得与申付見候様御達ニ付、即□高戸村船庄屋江使指出候事

同日

一 夜ニ入高戸村船庄屋新兵衛、善衛門宅江参候間、前文之次第申聞 公辺御納御用石炭之儀ニ付何分船主とも江申付、右様為積立候様相達候処、御用之儀奉畏候旨何れ明日ニも海上日和次第磯原濱江船相廻させ候様可仕旨御受申出候事

但シ銚子迄之運賃当節直段承り候所、石炭ニ候得ハ三俵壹石積り百石目ニ付運賃貳拾三兩ニ而為積立候様可仕旨、実ハ先日外々方石炭百石目銚子迄貳拾五兩ニ而積呉候様ニと赤根某と申者方頼有之候得とも、御用之儀ニ付常例之直段ニ而為積候様可仕旨、江戸迄ニ候得ハ百石目付三拾六七兩位ニ御座候半との申出ニ候事

一 右積立之節ハ 御屋敷様方運賃之内半分も粮米手当入用分ニ拝借被 仰付候様仕度旨、船庄屋方申出候事
三月十八日

一 今朝、榮吉又々善衛門宅江罷出、右高戸船之有無承り度旨申出候付、昨夜船庄屋江申達、右様申立有之候旨申聞ケ候処、夫ニ而安心仕候間、何れ岩城方廿一日頃戻り之節、又々模様相伺可申旨ニ而今日平潟迄出立之振申聞罷歸候事

三月廿六日

一 今日、国分左大夫殿并岡本久兵衛・高橋善衛門石炭山見分として石岡村觀音柵御手産分之堀場所方初り、大塚西明寺柴田早之助之堀場所等相廻り、磯原濱積出

置候石炭等見廻り、夕刻罷歸候事

但シ小林溪藏・隠密組小田木清次衛門出役、右何れも腰弁当持参之事

同日

一 松岡屋榮吉も右石炭山江一同相廻り、其後平潟船頼方として罷越候事

三月廿七日

一 右榮吉今日平潟方罷歸り申出候ハ、平潟ニ而豊吉丸と申船江積方約束致シ参候間、早速平潟江石炭三百俵為廻被下候様仕度旨申出候付、小林溪藏方船庄屋江為相達候事

但シ榮吉儀明廿八日出立、江戸表江罷歸候旨申出ニ付、国分殿江も申立候事

四月朔日

一 去月廿八日左之通り磯原濱方平潟江廻シニ相成候旨小林溪藏方申出候間、国分左大夫殿江も其段申立候事

覚

三月廿八日積立 此書出シ五俵之不足ニ相見候事
一 石炭貳百八拾五俵 柴田早之助納分

右者平潟湊油屋善次郎江相廻候

此段御届ケ申上候、以上

三月

磯原村

舟横目

野口又太郎印

覚

松葉印

高戸濱

一 石炭百五拾俵 但シ三俵石わり 日和丸源吾乘
此石五拾石自

但シ百石目ニ付運賃金貳拾四兩割 銚子迄

此運賃金拾貳兩也

内金五兩也 積立所ニ而用立

銚子湊

広屋武左衛門繼

江戸深川東平野町

信濃屋和介揚

右柴田早之助納分前書俵数、今四日当濱より積立仕候、依而書上申候、以上

卯四月四日

磯原村

舟横目

野口又太郎印

四月十三日

一 去寅六月廿三日方当卯三月廿八日迄、磯原濱方積出シ壳捌候俵書付御益納調、柴田早之助方指出候所、懐合如何可有之哉、尚得与船庄屋帳面取調様為仕度国分左大夫殿江も右書付入御覽、其後小林溪藏江右調方相達磯原江出役為致候処、今十三日別紙調書指出シ、先日早之助方申出候通相違無之旨申出候間、国分左大夫殿江も其段申立、近日柴田早之助罷出次第御益金為相納候積りニ候事

覚

寅六月廿三日積出シ
一 石炭百三拾俵 虎寿丸金助乗
同十一月五日積出シ 横濱江壳渡分

一 同 三百俵 順榮丸惣介乗
右同断分

一 同 百八拾俵 東海丸富藏乗
卯正月廿八日

一 同 百七拾四俵 平潟江小廻シ 野口分
同三月七日

一 同 百六拾九俵 右同断 野口分
同廿一日

一 同 百三拾四俵 右同断 緑川次兵衛方
三月八日 積廻シ分

一 同 右三行口松前江壳遣候分

三月廿八日積廻シ

一 同 百六拾五俵 豊吉丸積出シ

一 同 百貳拾五俵 御用納分

一 同 貳百九拾俵

一 同 石炭千三百七拾七俵也

此御益壹俵ニ付銀五分ツ、

此分納之儀追而相 銀六百八拾八匁五分
納候様押置候事

為金拾壹兩壹分ト總貳貫五百廿九文

右者去寅六月廿三日ヲ当卯三月廿八日迄石炭惣積出
高前書之通相調、御益上納仕候、依而書付奉指出
候、以上

慶応三年卯四月

柴田早之助

御勝手方

御役所様

覚

一 石炭拾貳俵

壹俵ニ付貳百文ツ、繩俵堀賃とも

外ニ三貫文 駄賃

貳口ノ總五貫四百文

右者江戸御用ニ而御登セニ相成候ニ付

御屋敷

迄大塚山方相送り申候、堀賃・駄賃前書之通り

相掛り申候間、此分御下ケ奉願上候、以上

卯四月

柴田早之助

四月十四日

一 磯原舟庄屋方別紙之通り申出候旨小林溪藏方申出有
之候間、岡本久兵衛并御用部屋江も申立候事

以書付奉申上候、石岡御堀立御用石炭九面鍵屋江積
廻シ候様御達之趣奉畏候、風次第早々廻シ積可仕

候、且其外平潟安満屋半兵衛方申越御座候ハ左ニ申
上候

一 権現丸船頭惣介乗石炭七百俵積、但運賃石炭百石
目ニ付金三拾六兩、外ニ百石目江金壹兩ツ、船中江
酒代被下候様願出ニ御座候、尚又当所ニおゐて入用
金不足指支候間、前金貳拾兩并借願出ニ御座候、御
貸渡ニ相成候様奉願上候、且平方江はしけ并平方之
掛りとも壹俵ニ付銀壹匁位大図相掛り可申候、此分
御下ケ被下候哉、又者安満屋方為受取ニ而宜敷御座
候哉旁奉伺候、石炭者柴田早之助堀出シ分俵揃居候

間早之助方江も申越シ、只前文奉申上候船手并借并
入用金等之次第御配符ニ而早速御達被下置候様奉願
上候、此段旁以書付奉申上候、以上

四月十四日朝

磯原村

舟橋目

野口又太郎

四月十五日

一 柴田早之助方使ヲ以別紙積立書附申出候事

送り状之事

赤一印小口松葉印 清徳丸 沖船頭次郎吉乗

一 石炭八拾俵

但シ貫切之節者一俵ニ付何百目ツ、
御用捨御請取可被下候

此石貳拾六石六斗六升六合目

百石ニ付三拾五兩割

運賃金九兩壹分ト銀五匁

外ニ金三分銀三匁 船中江手当

右者拾兩銀八匁 但シ御地着払定

右者 中山備中守様御用分

公辺御軍艦御用御荷物

積送り申候条、着岸之砌御改御受取被成下、運賃金

船頭方江御渡可被下候、送り状仍而如件

慶応三年卯四月

木皿村

仲屋六蔵

常州平潟湊

板屋市兵衛

江戸深川東平野町

信濃屋和助殿

同

松岡屋栄吉殿

四月十五日

一 昨十四日、水三方宿繼便ニ而江戸表方御運御座候ハ

公辺納之石炭江戸着無之 公辺方御催促、且未タ公儀

納無之内、江戸表江者常州松岡産之石炭至而上品沢山

ニぬけ俵相廻り相見候趣、□又平潟板屋市兵衛と申者

江戸深川東平野町信濃屋和助方江罷越石炭前金借用致
度旨、若シ金子下シ無之候而ハ積立一切出来不申振り
之申出ニて、信濃屋指支之趣松岡屋栄吉ヲ以江戸御屋
敷江申出候由御運ニ相成候旨、依而ハ柴田早之助手ニ
而石炭堀取方之儀者引上ケ候歟、又者早之助手ニ而ハ船
積方世話之儀者一切指留候歟ニ被成度旨申来候間、宜
相談取計候様御達有之候事

但シ岡本久兵衛方江も江戸御用部屋より右之通り

之御運有之旨、同人方善衛門江申聞有之候事

四月十五日

一 右御達ニ付岡本久兵衛一同相談之上木皿村江早刻配
符小林溪藏方為指出、柴田早之助呼出シ候様為致候事

四月十六日

一 昨日柴田早之助江配符為出候ニ付、今早朝罷出ニ
付、就将館岡本久兵衛詰所江小林溪藏同道呼出シ、前

件江戸表方御運之御沙汰有之候旨申聞、右様之不心
得ニ付而ハ石炭山御引上ケ、以来堀取方一切指留候

間、是迄堀取置候分今日小林溪藏出役江相渡シ候様、
尤右堀置候分高何程ニ而も上ケ追而代料者相渡可申旨

高橋善衛門申渡候事
但シ右申渡相済、御用部屋江も相届ケ候事

同日
一 小林溪藏大塚山石炭有俵受取として出役、俵数相改
夜ニ入帰宅届ケ申出候事

同日
一 昨日前書之通り石炭山御引上ニ相成候所柴田早之
助方室

〔抹消〕

一 四月十七日

一 昨日前書之通り石炭山御引上ニ相成候所柴田早之
助方室

同日

一 右石炭山御引上ケニ相成柴田早之助奉恐入候伺、手
綱町宝昌院ヲ以申出候間、御用部屋江申立候所早速御

聞濟二付、宝昌院江相達候事

四月十七日

一 手綱町宝昌院方柴田早之助之歎願書指出候旨ニ而小林溪藏同道高橋善衛門江申出候間、岡本久兵衛江も相談、其後国分左大夫殿江指出候願書左之通り

乍恐以書付奉嘆願候事

柴田早之助印

一 大塚村山石炭為心見堀取仕候処、当二月方

公辺御軍艦所御用納辻被 仰付、早速江戸表江為

積登相納可申之処心得違之儀有之、山御引上ケニ

相成候段重々奉恐入候、右山御引上ニ相成候而ハ

難渋仕候間、以後心得違無之様堀出シ積立相納可

申候間、格別之御仁恵ヲ以是迄之通り堀出シ被

仰付被下置候様偏ニ奉願上候、仍而如件

慶応三年卯四月

宝昌院

前書歎願之趣、以後心得違無之との儀ニ候得とも、是迄之通りニ而不宜候間、此方定之指図致シ、其通り之定ニ而も宜敷と申受書ニ而も指出候ハ、願之通り相濟候而宜敷旨御達ニ相成候間、又々伺出候節申付定書為出候積リ之事

覚

一 金貳拾兩也

東浦賀惣兵衛船
権現丸沖船頭惣助乗

右者 御用石炭積立仕候運賃金之内、船手前拝借

金前書之通り無相違御受取申上候、以上

卯四月十八日

磯原村舟横目

野口又太郎印

前書受取書付野口又太郎方倅ヲ以申出候所、今日

小林溪藏病氣ニ而相引候間、明日相渡候様可為致申

聞指戻候事

四月十九日

一 昨日又太郎方申出候前拝借金之儀、是ハ安満屋半兵衛船江七百俵為積候ニ付、貸渡シ不申候てハ不相成事

ニて、無抛次第之旨又々又太郎倅方申出候間、書付

御用部屋江入御覽相濟、高橋善衛門内貸手形ニ而受

取、寺門尚之助方為相渡候事

同日

一 石炭積立見廻り并山見廻り等小林溪藏老人ニ而ハ御

指支御用弁不宜候ニ付、外ニ寺門尚之助江溪藏同様掛

り被仰付候事

四月十九日

一 磯原船庄屋方別紙之通り村継書状相届キ候旨、小林

溪藏方封シ入書付添指出候事

以書付申上候 御用石炭積立別紙之通り九面江廻シ

積仕候、其外平湯安満屋半兵衛江廻シ積仕候分左ニ

奉申上候事

但シ先日石岡村石炭、九面鍵屋梅吉江積方頼候

旨大塚吉次郎方申出有之候事

○御印付

一 石炭三百三拾四俵 石岡出シ

一 同 貳百貳俵 大塚出シ

東浦賀
権現丸
沖船頭惣介乗

石炭五百三拾六俵 是ハ昨十八日迄ニ平

指引 石炭百六拾四俵分

是ハ今日積廻シ申候筈ニ御座候所、北風ニ而相成

はしけ船運ひ相成兼候間、順風ニ罷成候ハ、明日

ニ積廻シ仕申候事

右船平湯ニおゐて雇方之次第同所方申来候段左ニ

申上候 但シ石炭百石目付運賃金三拾六兩割、平湯

百石ニ付金壹兩ツ、船中江酒代被下候様

石炭壹俵ニ付錢拾文ツ、元船方はしけ之者共江酒

代遣候分定リニ御座候所、此分御荷物方御指出シ

被下候様此分石岡方指出置

平湯津役場江納分

一 舁下船帆役 此鏹三百拾貳文、此分渡濟

是ハ前年方都而荷物より指出来候事

一 金貳拾兩也 右同船江積所ニ而用立分

是ハ平湯方江戸迄運賃金之内積所入用金ニ拝借願出

置候分、此分早速御下ケ奉願上候

右件々御聞濟被下置候様奉願上候、以上

四月十九日

磯原村船横目
野口又太郎印

一 四月十六日積切

○印付石岡山産 江戸南新堀
順栄丸源藏乗

一 石炭三百三拾八俵 此石百拾貳石六斗六升目

但百石目ニ付運賃金三拾五兩割

内金拾七兩也 前運賃積所ニ而用立

残運賃金 江戸着渡り定

外 金三兩也 船中之者共江酒代遣寄之分積所ニ相

渡シ

一 金貳拾兩也 積所ニ而相渡申候分

此金船頭江渡相済申候間御下ケ奉願上候

九面鍵屋梅吉郎江廻し積

江戸深川東平野町

信濃屋和介揚

右 御用石炭九浦江廻シ積仕り、運賃内金并船中江

酒代とも積所ニおゐて前書之通り相渡申候所相違

無御座候、依書上申候、以上

卯四月十九日

磯原村
船横目
野口又太郎印

四月廿日

一 先日柴田早之助石炭山御引上ケ後、宝昌院ヲ以歎願書指出置候所、右者歎願之趣得与了間相定候間、何卒此嘆願書と先達之歎願書御引替被下候様奉願度、小林溪藏宅江宝昌院参候得とも、病氣ニ而相引居取継兼候趣ニ御座候故、寺門尚之助へ罷越相頼度罷出候得とも、是も今日者石炭山見廻リニ出役之由留守ニ御座候て甚指支候間、指付ニ者候得共宜敷取受申立呉候様ニと左之歎願書持参ニ付預リ、御用部屋江指出候事
乍恐以書付奉歎願候事

柴田早之助印

一 大塚村山石炭為心見堀取仕候處、当二月ノ公辺 御軍艦所御用納辻被 仰付、早速江戸表江為積登相納可申之処、心得違之儀御座候ニ付、山御引上ニ相成候段重々奉恐入候、已来心得違無御座様相護御奉公可仕候間、御手山ニ成シ被下置、大塚吉次郎同様御世話仕度奉存候、石炭□□は是迄□□仕候処御引上切ニ相成候而ハ面目も無御座次第二奉存候、何卒御仁恵ヲ以今一応堀方之儀被 仰付被下置候様、此段偏ニ奉願候、仍而如件

慶応三年卯四月

宝昌院印

御勝手方

御役所様

右願之趣ニ而ハ 上之御益も相増候事ニ付願之通り御濟口ニ相達、以来別而心ヲ用、大塚吉次郎同様世話方申付候様可仕旨御達ニ相成候事

四月廿一日

一 今朝、寺門尚之助同道ニ而柴田早之助罷出候間、高橋善衛門宅におゐて右歎願御濟口ニ付、以来大塚吉次郎同様世話方被 仰付候間、別而心ヲ用候様御達之趣

申達候事

覚

一 石炭六千四百五拾俵 惣堀高
内四千八百六拾俵 濱下ニ成ル
残千五百九拾俵 山ニ有リ
内三千七拾八俵 積立
内千百壹俵 海中捨リ
山引残千九百七拾七俵 全積立
外ニ拾貳俵
是ハ御屋敷納江戸御廻シ分
一 千七百八拾貳俵 濱藏ニ有
一 千五百九拾俵 山ニ有
式口〆三千三百七拾貳俵
前書之通り御改申請候分

柴田早之助印

前書之通見届請取置申候、以上

慶応三年
卯四月十六日

小林溪藏印

覚

〇御印付
一 石炭七百五拾五俵 石岡山出下ケ高
四月十五日 九面江廻シ積
内三百三拾八俵 順栄丸 源藏
四月十八日 平方江廻シ積
同三百三拾四俵 権現丸 惣介乗
〆六百七拾貳俵

残石炭八拾三俵

右之通り積立仕候残俵ニ御座候、以上

卯四月廿日

磯原村
舟横目

野口又太郎

覚

四月十八日 平潟へ廻シ積
〇御印付
一 石炭三百三拾四俵 石岡山産
平潟入津 権現丸
沖船頭惣介乗

松葉印

一 同 貳百貳俵

大塚山産

〆石炭五百三拾六俵 但三俵石割

此石百七拾八石六斗六升目

但百石目ニ付運賃金三拾六兩割

内金拾六兩也 前運賃積所ニ而用立

運賃

残金 江戸着渡り定

平潟濱

安満屋半兵衛積

江戸深川東平野町

信濃屋和介揚

外ニ金壹兩三分也 船中之者へ酒代遣候分

是ハ百石目ニ付酒代壹兩宛船中江遣候等之

分相渡申候

渡分〆金拾七兩三分也 船頭惣介江相渡申候

右御用石炭平潟湊江舥下ニ而運送仕、前書之俵数積立、運賃金内貸等前書之通無相違相渡申条、依書付指上申候、以上

卯四月廿三日

磯原村
野口又太郎

覚

一 金貳拾兩也 是ハ平潟入津権現丸惣介乗リ江御用石

炭積入候船手前拝借仕候分

別紙書上之面

内金拾七兩三分也 船頭惣介江渡ス

残金貳兩壹分也 過金分

右用立残過金、前書之通御返納申上候、以上

卯四月廿三日

野口又太郎

右殘金貳兩壹分寺門尚之助より指出候間、高橋善衛門内貸手形江内納ニ記シ、御金方江相納候事

覚

一 石炭貳百六拾石積 房州白濱利平船
福州丸沖船頭金次郎乗
右船今晦日夕当浦江下着仕候ニ付早速罷出 御用

石炭積受ニ仕候旨申聞雇付申候、右ニ付運賃等之
訳左ニ奉申上候

一 石炭百石目ニ付

運賃金三拾兩割

但百石目ニ付金五兩ツ、江戸着之御船中江

酒代遣候等

但金貳拾五兩也

是ハ粮米代等指支候間、前運賃金積所ニおゐ
て拝借願出ニ御座候、以上

前件申上候通船手願出ニ御座候間、前運賃金等之儀
も積所ニおゐて御下ケ渡被下置候様奉願上候、且積
立之儀ハ明後二日ならてハ積初立兼候様ニ奉存候へ
とも、御済口否之儀ハ明朝御達被下置候様奉願上
候、此段乍恐以書付奉申上候、以上

四月晦日

磯原村

船横目

野口又太郎

右申出書寺門尚之助方指出伺出候間、御用部屋江申
立、金貳拾五兩内貸ニて寺門尚之助江相渡、又太郎江
為相渡候へとも、先達松岡屋栄吉江戸方下り之節申出
二者、信濃屋和助方ニて房州白濱六兵衛船と申船相
雇、金貳拾五兩前渡致シ置候故、近々右船磯原江相廻
候ハ、為御積被下候様ニとの申置有之候所、今ニ廻り
不申候へとも、若シ右又太郎方申出之船同房州之白濱
と申、名前ハ少々違居候得とも、右信濃屋ニて頼遣候
船二者有之間敷哉得与承り糺候上ニて、願出之前金ハ
相渡候様為致度旨御用部屋江も申立、寺門尚之助江相
達、磯原又太郎江申聞ケ候様為致候事

覚

五月三日積立

房州白濱利介船

○御印付

福寿丸

一 石炭九拾六俵

石岡産

沖船頭金次郎乗

一同

一 同七百四俵

大塚山産

石炭貳百六拾六石六斗六升六合目

但百石目ニ付運賃金三拾兩割

此運賃金八拾兩也

内金貳拾五兩

積所ニ而相渡申候

残運賃金五拾五兩也

江戸着渡り

但百石目ニ付

金五兩ツ、江戸着岸之御舟中
之者共へ酒代遣シ申候定

御軍艦

江戸深川東平野町

御用御納品

信濃屋和介揚

右者御用石炭前書之通積立仕り、運賃金之内船頭

江相渡申候処相違無御座候、依書上申候、以上

卯五月

磯原村

舟横目

野口又太郎

五月五日

一 去月六日、平潟出帆ニ相成候高戸村豊吉丸紋十乗
船、三月廿八日磯原方平潟江相廻候、積立ニ相成候石
炭、四月八日之時化ニ而荷打ニ相成、房州浦ニ泊船ニ
て居り候得とも、江戸表江者相廻り兼、又々銚子湊江
引返シ入津ニ罷成候旨、態々銚子広屋武左衛門方方
飛脚到来、只今書状受取候間御訴申上候趣ニ而舟庄屋
父皆川新兵衛申出ニて、左之通り荷打調書指出候ニ
付、写取御用部屋江も申立候事

但シ右石炭船江積太郎左衛門之商用板類并

松本謙藏之商用板類積合之調書何れも

荷打之由ニ有之候得とも、此分ハ除キ

写取不申候事

覚

四月晦日銚子湊江荷打入津 高戸村豊吉丸紋十乗

一 石炭貳百九拾俵 内百六拾八俵海中捨り

残り百貳拾貳俵有物

百石ニ付金貳拾三兩割 内拾壹兩也 御

国渡シ

右者 中山備中守様御用荷物

本所林町五丁目

松岡屋栄吉殿

深川東平野町

信濃屋和助殿行

平潟

油屋善次郎殿積出シ

五月五日

一 昨四日、柴田早之助罷出申出候ハ、此節精農之節ニ
罷成馬雇兼候間、自分造建置候川船ニ而相下ケ候様仕
度、尤當時先□石炭堀出シ方見合候様御達も御座候ニ
付、右堀職人ヲ雇、是ニ山方川端迄之所者馬ノ半駄賃
ヲ以車ニて押運セ、川船ニ而磯原濱藏迄積上ケ込入ヲ
又馬半駄賃と見て、都合式俵ニて馬老疋之賃錢ニて為
送候様仕度、依而ハ大砲御入用之車損シ品ニて御用ニ
立不申御品御座候ハ、拝借被 仰付候様仕度趣申出ニ
付、御用部屋江申立候所、車ハ不用之分有之候半間、
佐々又市江相達見為出候様可致候得とも、船積ニ相成
候て後、磯原迄之場所馬賃錢と申候てハ、譬へハ三拾
俵積下ケ候得ハ余程之賃銀ニ可相成、且船ニ而下ケ候
儀者格別骨折も有之間敷事之処、馬駄同様と申候てハ
余り当り不申儀ニ付、老俵ニ付船積ニ相成後ニ何拾文
掛りと敷相定可然旨御達ニ付、其段得与相調早之介江
相達候様寺門尚之助江相達候事

五月六日

一 三ノ丸方石川幸助帰宅、便ニ江戸表方御用状相廻
り、去月廿九日仕出ニ而申来候文面ニ、石岡村山産石
炭三百拾八俵并大塚山石炭八拾俵着船之旨、松岡屋栄
吉方届ケ 御上屋敷江申出候間、則御用部屋江申立候
処、太田新衛門殿御軍艦所鈴木哲之助殿被罷出御目録
袴地代金千疋被遣候趣、猶又御留守居ヲ以御軍艦所江

御届ケニ相成候所、荒井稻次郎と申人請改、其後海軍所江相廻候様との御差□有之、依而右相廻候船江御家御「」候上乘致為御廻之振ニ御達ニ相成候旨、且又大塚山石炭八拾俵之外ニ早之助心得違ヲ以、明石屋治衛門江商用口ニ送り候品之由ニ而式百俵余信濃屋江相廻候間、是亦前件俵数江組入一同納ニ仕度旨、松岡屋栄吉方申出候趣等之事申来候事

但シ右御用状ニ而申来候旨御用部屋江も申立候事

五月十日

一 寺門尚之助方左之通り之書付指出候間、御用部屋江相伺積立させ候様相達、前拝借金積掛り金等内貸ニ而受取為相渡候事

覚

江戸南新堀栖原久三郎船
順栄丸
沖船頭源蔵乗

一 石炭四百五拾俵 積

是ハ百石目ニ付運賃三拾五兩割ニ而前運賃金貳拾五兩也、積所ニ而拝借願出ニ御座候、外ニ金三兩ツ、船中酒代江戸着之上被下願出ニ御座候、兩様御聞濟奉願上候

右順栄丸儀、四月中九面鍵屋梅吉江舁下船ニ而廻シ積仕候船ニ御坐候所、江戸無事着之上昨日下午帆ニ相成候所、此度ハ「」懸ケ積ニて前書運賃割願出ニ御座候、右「」之様奉存候得共、最早植付之時節ニ罷成候間、近□□帆之船難計候故、右割合ニ而御済口ニ奉願上候、尤否之哉之儀ハ急速御達被下置候様奉願上候、以上

卯五月九日

磯原村

舟横目

野口又太郎印

附札ニ而

日和宜敷候得ハ明日ニ当浦江廻船仕度申出ニ御座候間、願之通御済口何分奉願上候、以上

覚

一 金貳拾五兩也 順栄丸
沖船頭源蔵乗
是ハ石炭四百五拾俵江戸迄運送仕候前運賃拝借分

一 同三兩壹分貳朱 但老儀ニ付銀四分五厘ツ、是ハ右同斷積立仕候当河岸積掛り分

ノ金貳拾八兩壹分貳朱

右者船手前拝借金并積懸り金等前書之通り御受取無相違相渡申候、以上

卯五月九日

磯原村船横目

野口又太郎印

五月十一日

一 大塚吉次郎罷出候間、九面鍵屋梅吉郎所持之五百石目船御用船御造立ニも相成候旨之處、古船ニ而も宜敷候ハ、御買上ニ指上度段、先達吉次郎ヲ以申出有之候旨、弥指上候ても宜敷候哉、代料者何程ニて指上候歟、又者 上之御買上ニ致シ、船者鍵屋江御預ケ船頭等ハ鍵屋ニて持切、其代り 御用荷無之節ハ売用品為積候て宜敷事ニ付、代料者夫丈ケ下直ニも被指上候歟杯之所、九面鍵屋江得与相談申出候様ニと相達候事

五月十二日

一 今夕、柴田早之助一同寺門尚之助、善衛門宅江參候ニ付、石炭壹俵ニ付諸掛り当節之處積書之面相談ニ及候処、先頃大筒車拝借仕、山方為出候得とも、車ニ而ハ中々出不申候間、車ハ相納候旨、右ニ付而ハ近村江御達ニ相成候て、駄賃馬ニ而木皿村川端迄為御下ケ被下候様仕度旨、且船ニ而昨十一日濱下ケ仕候得とも、漸老艘ニて拾六俵積入相下ケ申候、依而馬駄賃ヲ被下

候得ハ如何様ニ敷引合候得とも、下直ニ被 仰付候而ハ石炭堀職人共ニ而船ヲ漕下ケ候事ニ付、其日之渡世ニ相成不申候様ニ相成候故、馬駄賃ヲ被下候ハ、為下ケ可申候得とも、下直之儀被 仰付候儀ニ御座候ハ、磯原村江御達ニて川船ニ而下ケ候儀ヲ受負候者御出来ニ相成候様奉願度旨早之助申出候間、川端迄下ケ候駄賃馬之儀并川船受負人磯原村江相達見候様尚之助江相達候事

当節石炭壹俵ニ付諸掛り調

一 石炭壹俵 是迄總百文ニ而堀居候代りニ
一 總百三拾貳文 堀賃 是迄總百文ニ而堀居候代りニ
米者金壹分ニ付白米三升直段ニ而相渡置候 御手産と相成候てハ米相渡シ無之候故、米三升直ニ相成候上ハ此通り被下ニ不相成候てハ堀方難治之趣

同斷 老儀
一 同貳百貳拾四文 磯原村江濱「」 一 賃
是ハ是迄「」ケ候所精農之時節ニ付馬沢山出候迄貳拾「」被下候様仕度旨

一 同百拾三文 繩俵 □□五拾四文 会所掛り
一 總五百貳拾七文 内貳百貳拾四文 駄賃 此分濱間屋ニて払

指引殘總三百三文 山ニ而之掛り

此外、道橋之手入、敷口之土方、敷之内留木代 但シ老本老々ツ、臨時入用者時々ニ可申上候
前書之通相調書付奉指上候、以上

慶応三年卯五月

柴田早之助印

御勝手方

御役所様

右調書之内会所掛りと申ハ何様之儀ニて掛り候哉と承り候所、是ハ人老人山石炭堀場所江日々相詰居、堀出

シ俵数并善悪撰吟味仕、或ハ濱江参り、送り候石炭俵雨等ニ不当様ニ配り、又者山方馬ニて下ケ候節送り書ヲ認メ馬方江渡シ、縄俵之買入方ニ村々江相廻り候杯老人持切ニ為致不申候てハ不相成事ニ付、此者之賃錢ニ被下候様ニ之儀に付、何程日々相詰居候とても忝俵ニ付五拾四文ツ、と申候てハ餘り多分ニ相成候賃ニて相当無之、殊ニハ 上之御手産ニ相成候てハ縄俵者村々江御買上之儀相達為附送候儀ニ付、是ハ忝俵三分掛り位ニて可然旨早之助江申聞、右調書 御用部屋江入御覽候事

但右之通り申立相済、寺門尚之助江其段相達候事

五月十四日

一 寺門尚之助より今朝申出候ハ、磯原野口又太郎方石炭濱下ケ参候節、駄賃相払候分内貸ニ而金貳拾兩并借仕度旨申来候趣ニ而又太郎方之願書付指出候間、寺門尚之助之内貸手形ニて金貳拾兩押切御金方為受取候事

但シ此段御用部屋江も申立候事

五月十六日

一 石岡山産石炭三百三拾八俵、九面鍵屋江相廻シ、四月十九日磯原方廻シ切之節、運賃并船中酒代共、金貳拾兩前貸分大塚吉次郎方指出置候間、此分吉次郎江御下ケ被下候様願出候旨ニ而寺門尚之助方内貸受取手形指出候間押切相渡候事

五月十七日

一 磯原濱藏ニ有之候先年御郡方ニ而為堀候古石炭、俵造り替江戸信濃屋江送り、何程成り商用ニ売候様為致候てハ如何ニ御座候半歟、御用部屋江先日相伺候所、其通り取扱候様御達御座候間、今日寺門尚之助一同高橋善衛門磯原江罷出、木皿村柴田早之助も石炭堀職人

召連為罷出、右職人江俵作り替申付、古俵為解、一々相改候所、何れも洪喰之石炭、且土石多ニ而甚見悪キ石炭ニ而迎も売物ニも相成申間敷品ニ相見候間、先ツ三俵撰抜之品為作替候得共、是以洪喰之品ニ有之候間、跡ハ先ツ作替見合させ、何れ伺之上相達可申振りニ磯原野口又太郎江申聞ケ帰宅之後、右之次第御用部屋江申上候所、右様之品ニ候ハ、試ミニ廻迄も無之事ニ付其儘打捨置、若シ好人も有之候節ハ代料何程成共高下ニ不拘売払候様、又者永く買人も無之候ハ、蔵塞キ之品故取捨候ても可然旨御達ニ付、江戸信濃屋送り之儀ハ相止候旨寺門尚之助方野口又太郎江為相達候事

五月十九日

一 江戸表方御飛脚弥衛門「」着便ニ、石炭江戸着并信濃屋雇船下シ之「」公辺納掛り役人へ受取写等、左之通り申来候事

石炭積船着之覚

四月廿四日着 松葉印

一 石炭三百三拾八俵 石岡山分

同日着 同印

一 同 八拾俵 大塚山分

無印ニ而送り候 松葉印

一 同 貳百三拾五俵 明石屋治衛門方廻ル分

五月十日着 松葉印 銚子送り状

一 同 百四拾八俵 日和丸源吾乗、川船紋四郎 大塚山分

但磯原出百五拾俵之送りニ而

貳俵積不足、銚子広屋断

五月十日着豊吉丸紋十乗 松葉印

一 同 貳百貳拾貳俵 大塚山分

但積出貳百九拾俵之口松葉

印、此内百六拾八俵海中捨

り、尤銚子送り状ニ四月晦

日荷打之断書

外百七拾俵荷打并積不足

ベ九百貳拾三俵

右之内六百六拾俵 海軍所納済

残貳百六拾三俵 此内俵造り直シ等ニて俵数拾俵余も減候由ニ御座候

右之所信濃屋和助方ニ而此表払石炭百俵買入、都合先千俵者急速追々相納候旨栄吉申出候事

卯五月十二日

江戸吟味所

公辺江納石炭受取書写

覚

一 石炭 六百六拾俵

右之通請取申候、以上

五月八日

數内三七郎印

信濃屋雇船前金貸渡候受取證文之写之由、左之通り

御前金證文之事

一 金六拾六兩也

百石ニ付四拾兩之割御前「」片金

右者此度中山様御国産「」積御用石炭御積取方ニ付御雇船ニ相成、書面之通前運賃借用申出実正也、然ル上者御当地早々出帆、若又船頭心得違ニて途中滞船一切為致申間敷候、直様御積所江相廻シ御荷物積取、外荷物等為積合申間敷候、萬々一不正之筋有之候節者我等引受弁金致、貴殿江聊御損毛相掛ケ申間敷候、為後日前金拝借証文、仍如件

慶応三年卯五月七日

靈岸島塩町 丸屋十蔵印

房州柏崎良助船

順徳丸 惣次郎印

信濃屋和助殿

右雇船送り状之写

空舟送り状之事

一 三百三拾石積

房州柏崎良助船

順徳丸惣次郎水主共六人乗

五年送

右者御公辺御用石炭為積取雇船差向候ニ付、貴地着

船之節早速御積入可被成候、尤積所入用共前運賃相渡置候間、此段御承知置可被成候、仍如件

慶応卯年五月

江戸深川木場

信濃屋 和助

取扱人

松岡屋栄吉

常州磯原濱

野口彦六殿

右石炭積船着之覚并六拾六両之證文写、空船送り状とも三通、寺門尚之助江相廻シ、磯原船横目江右三通之趣為心得、早速相達置候様、且石炭「」之儀相糺候様為申付候事

御用状之略写

一 御軍艦所御納石炭追々参着、別紙之通ニ御座候間宜御承知可被下候、右之内六百六拾俵去月廿九日方当月六日迄ニ海軍所江無滞相納候ニ付、同所懸り役人請取書尅通栄吉持参申出候間、御用部屋江申立之上、請取書ハ役所江預り置申候、右請取写懸御目申候、右納方之儀も最初者一日ニ相納候積りニ而御徒目付大森兼吉出役、去月廿九日ニ罷出候所、俵作り直等ニて手間取れ、且又御大名方石炭直納之義ハ此度初而之由ニて、尅俵毎ニ貫目改ニ而可有之沙汰ニ付、夫ニ而ハ多分之目切等も出、御損毛ニ付信濃屋并松岡屋栄吉夫々江手を廻シ、尅俵切之改無之、相応之俵ニて四五俵も貫目改、平均ニ相済候様取扱候旨、信濃屋ニて俵改候節ハ拾三貫目位ニ減居候も有之候旨、別而石岡分ハ何れも拾五貫目位ニ御座候由、納拾五貫五百目迄ハ尅俵拾六貫之見通ニ相済候旨、此後之処ハ其表積出者無相違拾七貫目俵ニ致候様其筋江御達可被下候

一 此度石炭御軍艦所御直納相済候ニ付、外石炭之御用相勤候者方納候分者品不宜 御家之品至而公辺之通り

宜敷御座候ニ付、何れも信濃屋手ニ而ハ雇船不相成様之内ニ取極ニ致シ置候哉ニて、和助・栄吉も差支候ニ付、廻船御用達加納治郎江頼入、同所方之申達之由ニて丸屋十蔵与申廻船問屋ニて 御用船同様ニ雇船尅艘出来、運賃半渡ニて右受取、栄吉方指出候間、此御用部屋江も入披見、役所江留置申候、此写も別紙懸御目ニ申候、外ニ雇船送り状写共四枚指下候間、御入手之上宜敷御承知可被下候、何も近々信濃屋方可然者其表江指出、磯原ニて荷受敢為致度段申出ニ御座候、尤其者指出候上ハ萬端其表ニ而も御指図御添心被下、石炭御用向ハ萬事無御腹藏被仰付候様奉願候旨、此段「」栄吉方申聞ニ御座候、御心得申上候、式百九拾俵口石炭「」拾八俵捨りニ罷成候

□ハ右船頭方も帰船之「」出候事と奉存候

五月十三日

江戸吟味方

五月廿日

一 前書之通り申来候ニ付磯原濱ニ石炭何程有之哉、且此後江戸表方船相廻り候節、積立指支無之様宜敷調置候様御達ニ付、寺門尚之助江相達候事

覚

大塚山石炭 御手産ニ相成候ニ付而ハ、左之通御手

当ニ者相成間敷哉之旨、柴田早之助方申出候事

一 石炭堀場入口江

御国産御用石炭堀場

此通り柱杭木江相認メ建候様仕度旨之事

一 御高張御挑燈 尅ツ

石炭見置会所小家江建置候様仕度旨之事

一 御印付弓張挑燈 尅ツ

是ハ石炭見置会所ニ而夜中見廻り等之節之為メ、用心ニ御渡置被下候様仕度旨之事

一 石炭見置会所小家尅間ニ九尺位板囲ニ御出来被下候様仕度旨之事

右之通り申出候間、此段奉相伺候事

五月廿三日

石炭掛り

前書伺之通り取扱候様御達ニ付、寺門尚之助江相達候事

五月廿五日

一 石炭堀場江御指出之高張、今日御矢倉奉行方受取、柴田早之助江為相渡候事

但シ御矢倉奉行江者高橋善衛門御預り手形入置候事

一 此節精農之時節、如何ニも馬無之濱下ケ指支候趣ニ付、御領中牛持共江相達、尅疋ニ而三日宛相勤させ候ハ、余程之俵数相下り可申旨寺門尚之助より申出候間、御用部屋江申立、其通り為取扱候事

但シ御領中牛数當時三拾疋も有之旨、且駄賃ハ尅俵ニ付總式百文ツ、之割合ニ相達候事

一 寺門尚之助、磯原方大塚山相廻候所、此節磯原二千俵余、山ニも千六七百俵有之旨申出候事

一 右申出俵数ニ而ハ御指支ニも可相成候間、跡堀方為取急候様相達置候事

六月三日

一 夕暮時、水三方宿繼便ニて江戸御用状左之通り申来候所、猶又御用部屋江も御運ニ相成候趣ニ而 公辺御船相廻り候ハ、磯原濱ニ式千俵有之候様手当可致旨御達ニ相成候事

御用状文略

書添得貴意候、昨夕松岡屋栄吉罷出、石炭代金未タ御下ケ金之御沙汰無御座候ニ付、別紙尅通写之通栄吉方願書指出置候由、御覧之上御承知可被下候、其

表御積出之石炭も惣体二而一昨廿七日迄ニ都合式千四百俵余着船ニ相成候由ニ御座候間、先便御運「

」者不残着船と奉存候、尤其内荷打之分百〇拾「

」之事ニ御座候、先達六百六拾俵納ニ相成候後

「」着船分大凡左之通り

五月初旬着

一 五百三拾俵程 一 式百六拾俵余

五月廿七日着

上同斷

一 六百五拾俵程 一 一百五拾俵程

右之内初旬入津之分、先口共千四百五拾俵者納相濟

候旨、此分前文之通別紙代金御下ケ願之分ニ御座

候、廿七日着之分者未荷改も不致、而三日之内ニ者

是又改相納候趣ニ御座候、委細者信濃屋和助江相達

置候間、近日取調書持參致候趣ニ御座候間、指出

次第其表江相廻シ候心得ニ御座候

一 和助・栄吉両人方海漕方江手続を以相願、蒸氣船

歟君沢形等之御船積取方御指下之様願濟ニ相成候

由、御下知書写別紙之通り栄吉指出候間、則相廻

懸御目申候、尤右御船者磯原御買上之積ニて願濟之

由、御船者左ニ御座候

一 蒸氣船 光速丸 五百石積

但此船ニ候得ハ六月十日方江戸出帆ニ而一日之内ニも其表江着船可致由

一 二本柱 千秋丸 七百石積

但六月初旬ニ出帆ニ相成可申

右両船此節御用間合ニ付、右両艘之内何れ歟一艘其表

江右之日付頃罷下候旨申出ニ御座候間、着船之上者早

速積立間ニ合候「」候品吟味之上御堀取濱下ケニ

御取扱可被成「」、此度ハ信濃屋方老人手代差下

シ磯原「」取、右船等江「」心組ニ御座候

間、栄吉申出ニ御座候、公辺御船運賃者百石目四拾七

兩式分与申事ニ御座候、末文略ス

御下知書写

常陸国磯原出石炭御買上并運送物之儀共御下知相濟候

間、早々彼地取計方手配可致候、尤右ニ付一応当方江

印形持參今夕歟明朝迄ニ被出向候様致候度存候、以上

五月廿六日

海船方詰合

上書

信濃屋和助殿

松岡屋栄吉殿

海船方名前左ニ

老人両名

御用達名目 宮屋久兵衛

帶刀御免本名 加納治郎作

右之通ニ御座候、以上

覚

一 篩拔石炭 千四百五拾俵

此代金五百七兩式分也

但老俵ニ付式拾老兩割

右者中山備中守様御国産石炭、当五月六日方廿五

日迄、元御場所江上納仕候処前書之通りニ御座

候、依之御代金御下ケ被下置候様奉願候、以上

卯五月

納方扱人

松岡屋栄吉

海軍所

御役所

卯六月八日着

一 国分政衛門下り便ニ石炭之儀左之通り申来候事

但此外ニ石炭代御下ケ金願写相廻候所、先便下シ

分と同様ニ付写略ス、且君沢形送り送り荷請手

形下書写相廻候得とも、追而下シ候本書ヲ留候

故此分略ス

御請

一 常州多賀郡磯原濱出シ石炭御買上并御運送之儀
兼而奉願上候処、右願通被 仰付難有仕合奉存

候、然ル上者御品柄精々吟味仕、出精御用可奉相
勤候、依之御受書指上申候、以上

慶応三卯年六月

松岡屋栄吉印

信濃屋和助印

廻漕方

御役所

卯六月十三日

一 水三方宿継便着ニ而先達運有之候 公納石炭千四百

五拾俵之代金御下ケニ相成、松岡屋栄吉受取持參之

旨、右者五百七兩式分ニ候処、三百兩ハ御屋敷江納、

残式百七兩式分ハ信濃屋方ニ而是迄運賃等諸入用分江

御下ケ被下候様ニと栄吉申出ニ付、則式百七兩式分ハ

信濃屋江相渡候処、追而勘定調訳書可指出旨栄吉申出

候由、扱右御屋敷江相納候三百金早速御下シニ可相成

所、五軒町御長家御普請金為御登分も有之ニ付、三百

兩之内式百兩者為替ニ致シ、跡百兩者「

」御飛脚ニ而も登り候節御下シニ可相成

旨、先為替手形之ミ指下シ候趣ニ而式百兩為替請取目

録老通相廻候間、御用部屋江其旨申立、右目錄者御金

方江相渡置候事

六月十六日

一 昼九ツ時過、江戸松岡屋栄吉使虎吉と申者岡本久兵

衛方之御用状持參、高橋善衛門宅江參候間、左之通江

戸表方運来候旨御用部屋江申立、寺門尚之助等江も其

趣相通置候事

御用状略

然ハ先便も申上候通、海漕方御船蒸氣行速丸日和

次第此表来ル十五日方出帆之趣ニ付、松岡屋栄吉

代之者ニ而虎吉と申者急速此表出立、三日道中位

ニ申付其御地江指下候間、同人着之上其御屋敷江

も罷出、磯原ニ而為積立候趣ニ御座候間、参着之上宜御取計萬事無滞御心付被下度奉存候

一 右行速丸江海漕方江信濃屋・松岡屋両人方頼書

先便御廻不申候間、此度写老倭通別紙ニ而懸御目申候、磯原渡シ老倭九両ニ御座候得者、老倭ニ付銀

老勿五分宛之益金ニ御座候処、内五分ハ老倭ニ付納之内俵改飾拔等諸入用、同五分ハ夫々之役筋附

届并兩人奔走ニ付入用、同五分ハ御益ニ指上候旨、尤代金者此表江着品改之上其筋方此表ニ而相

下り候由ニ御座候、此海漕方ハ御勘定奉行持ニ御座候所、全榮吉老人之骨折ニ而出来候事ニ御座候

覚

一 石炭老倭 百斤人

代銀九匁

但シ常州多賀郡中山様御領分磯原ニ而御元船台之上渡ニ仕候直段

右者中山備中守様御国産石炭、前書直段を以於積所ニ御買上被成下置候様奉願上候、就而ハ当節中山様方海軍所江石炭御上納ニ相成候分多数出荷有之候間、右御荷物御積取之節御積高半艘分御定御運賃を以御運送被下度、此段奉願上候、以上

卯四月

證人

信濃屋和助

願人

松岡屋栄吉

廻漕方

御役所

前ニ記落シ

六月十五日

一 覚

房州柏崎良助船

順徳丸惣次郎乗

右者御用石炭為積取江戸信濃屋和助方雇船今十五日当浦江下着仕候間、今夕満水之時節ニ至り積初立候様仕候旨奉存候、此段御届ケ申上候、尚又積切仕候ハ、早速以書付御届ケ奉申上候、以上

卯六月十五日

野口又太郎

六月十五日

一 石炭御用懸り下役寺門尚之助計リニ而ハ時々出役大儀ニ付、石川友之助江尚之助同様石炭懸り下役被仰付候事

但シ前書訴出有之ニ付、早速今昼後方友之助磯

原江出役ニ相成候事

六月十七日

一 大塚山石炭会所懸り諸入用賃銀之内金五両也、会所付文太拝借奉願候旨申出候段、寺門尚之助方申出ニ付、内賃手形ニ而尚之助方為相渡候事

同日

一 昨日罷下候松岡屋代虎吉、今日大塚「」より磯原濱順徳丸江積方等見廻として罷越候旨申出「」事

但シ右虎吉と申者、松岡屋之実家綱屋文蔵方ニ暫滞留仕候旨、是亦申出有之候事

六月十七日

一 今朝石川友之助磯原方帰宅、昨十六日夕別紙之通石炭積立ニ相成候旨、且右積船順徳丸ハ江戸信濃屋ニ而運賃半金相渡シ下シ候船にて、運賃前貸等者此表ニ而構無之筈之所、当月五日江戸出帆之所船中水主之内病人有之、無抛房州柏崎滞船、日数相掛り、江戸表ニ而受取来候金子も遺果シ、帰船粮米手当ニ難渋仕候間、何卒運賃之内拾両拝借願野口又太郎江願申出候趣同人申立ニ付、不得止其通り為相渡候旨申出候事

覚

○御印付
一 石炭八百五拾俵 大塚山産

石ニベ式百八拾三石三斗三升目

但運賃金之儀者江戸表定通

外 江戸表用立分

内金拾両也 前運賃金拝借分積所ニ而相渡ス

御軍艦御用分 江戸深川東平ノ町

信濃屋和助揚

右大塚産御用石炭、前書之通今十六日当濱方無相違積立仕候、依書上申候、以上

卯六月十六日

磯原村舟横目

野口又太郎

六月十九日

一 朝四ツ半時過磯原野口常之助罷出候ハ、兼而御達も御座候廻漕方式本柱御船昨夕平湯湯江入津、別紙御書付持参、日和次第磯原濱江乗廻シ積立仕候旨案内申出之趣「」達「」早速御用部屋江も申立、磯原江船廻り訴有之「」寺門尚之助出役仕候筈申立置候事

覚

廻漕方納 船頭 喜三郎

一 石炭 六百俵

右者此度君沢形六番御船為積請御差下ニ付、此手形引替書面之通無相違御渡シ可被成候、以上

中山備中守 小泉左治馬印

慶応三年卯六月 江戸屋鋪 岡本久兵衛印

常州松岡

高橋善衛門殿

吉沢治衛門殿

六月廿二日

一 夕暮時、江戸表江去ル十三日立之御金才料新組弥六・飛脚勤宇吉帰着、先日運有之候通り石炭千四百五

拾俵初納代金五百七兩貳分之内、三百兩信濃屋が此表
江下シ分指出候所、貳百兩ハ為替ニ相成、先日手形ニ
て下シ、跡正金百兩先便右両人才料ニ而指下候旨にて
御金入箱相廻り、吉沢治衛門一同御用部屋持参ニ而罷
出、申立之上相改無相違御金送り目録とも御金方江相
廻候事

御用状写略

松岡屋栄吉罷出、石炭送り状写別冊老帳指出候
間、今便相廻申候、御落手可被下候、猶 公辺納
ニ付飾拔減俵等之調書ハ追而差上候与之申出ニ御
座候、右送り状之内野口彦六等方指出候分、此表
信濃屋和助一名当之送り御座候所、右様ニ而ハ指
支候間、何卒松岡屋栄吉両名之送り状已来相廻候
様御達可被下旨申出候、宜御取計可被下候、下略
ス

御用状之内略文写

一 蒸氣行速丸御船乗組頭并下役左之通り

御勘定方御普請役 下役同心 同 苗字ハ
高林静助殿 松本作兵衛 栄吉失念文蔵
右三人御船中取締り之由ニ御座候

前書之通ニ御座候間、蒸氣船磯原着ニ相成候共、其
表御役筋之外船見物等成ル丈ケ御指留ニ致度旨栄吉
申出ニ御座候、御船水主共ハ殊之外氣荒之者ニ御座
候由、若何歟間違等も御座候而ハ跡々之為ニ不相成候
旨、且右之船中取締役人三人之者江其表ニ而御目録等
被下御心配者無之□宜旨、尤別段御頼等ニ而取扱向等
之儀も御座候ハ、格別之儀与申事ニ御座候間、何も御
構無之方可然奉存候、且又萬一能仁寺山高戸下ケ之
石炭 公辺御船を便船とか積合と歟願出申間敷もの
ニも無之候間右者御断、相对ニ而も猶更ニ此表送り状

面之通ニ御座候間、御断被下候様是亦栄吉申出候、
下略ス

六月廿三日

一 前文之申来候次第御用部屋江申立候所、則蒸氣船着
之節見物人不罷出様御達触出候事

六月廿四日

一 昼時前、磯原より寺門尚之助帰宅、昨早朝二本柱君
沢形御船石炭積「」て磯原江相廻り趣ニ付役
仕、則昨日無滞別紙之通り積入ニ相成候所、大塚山
元并道橋損シ場見分願出有之、相廻り帰宅之旨申出
候事

一 君沢形江積立候而も跡蒸氣船廻り候而も御指支無
之、却而此表雇船老艘位積程餘り可申旨、併打続キ蒸
氣船御廻シニ而ハ中々山元俵菰出来方間ニ合申間敷、
殊ニ他領小豆畑ニ而ハ菰百文ニ付老枚半直ニ而買入候
故、此方江計り売候を好ミ、百文ニ貳枚之御買上ニ而
ハ納埒明キ不申、指支候趣申出ニ付、無拠御用部屋江
も申立、外々買入並ニ老俵半直ニ而為相納、早々出来
させ可申様尚之助江相達候事

覚

松葉 君沢形六番御船 船頭喜三郎乗
○御印付

一 石炭五百五拾俵 但三俵ニ而老石割

石ニベ百八拾三石三斗三升目

廻漕方 江戸深川東平野町
御用分納 信濃屋和介
松岡屋栄吉繼

右大塚山産 御用石炭前書之俵数当濱より今廿
三日積立仕候処相違無御座候、依而書上申候、已
上

卯六月

磯原村
舟横目

野口又太郎印

一 金四兩貳朱也 右君沢形江積入河岸懸り

一同三拾兩也 是ハ追々山々濱下ケ駄賃錢渡分、野
口又太郎江相渡可申分

右之通り御渡シニ相成候様仕度旨尚之助より申
出候間、則内貸手形押切相渡候事

七月二日

一 松岡屋栄吉代虎吉儀、九面鍵屋梅吉船大栄丸相雇候
所、運賃も下直ニ相談相成候故、明三日磯原江相廻
シ、同所方積立為致旨野口又太郎方申来候趣、寺門尚
之助方申出候間、御用部屋ニ相伺候候、蒸氣船相廻
候而も指支無之候ハ、為積候て可然旨御達ニ付、則前
運賃貸渡分共積懸迄寺門尚之助内貸手形ニて相渡候
事

覚

九面鍵屋梅吉印
大栄丸虎蔵乗

○御印松葉印
一 石炭千四百俵 但シ三俵ニ付老石目割

石ニベ四百六拾六石六斗六升目

但百石目ニ付運賃三拾六兩割江戸着渡

内金四拾兩也 前運賃積所ニ而相渡ス

江戸深川東平ノ町
信濃屋和助
松岡屋栄吉繼

右者大塚山産 御用石炭今三日当濱方積立仕候、

前運賃金無相違相渡申候、依而書上申候

卯七月三日 野口又太郎

前書石炭俵数積立ニ相成、出役寺門尚之助帰着申
出候事

七月四日

一 柏崎順徳丸并君沢形六番御船・大栄丸、右三度之運

送積立之儀、今日仕出シにて江戸御用状江相運候事

七月九日

一 松岡屋栄吉代虎吉、九面ニ而相雇候船左之通り積立候旨、寺門尚之助方申出候間御用部屋へ申立置候

覚

江戸深川兵助船妙法丸沖船頭政吉乗

○御印付

一 石炭五百五拾俵 但シ三俵ニ而老石割

此石百八拾三石三斗三升目

但シ百石目ニ付運賃三拾五兩割 江戸着渡

御軍艦御用納分

江戸深川東平野町

信濃屋和助

松岡屋栄吉揚

右大塚山産 御用石炭前書之通り今八日積立

仕候処相違無御座候、依書上申候、以上

卯七月

磯原村

舟横目

野口又太郎印

一 松岡屋栄吉代虎吉儀、蒸氣船廻り次第石炭積立方取扱之積りニ而日々相待居候得とも今ニ相廻り不申候故、先達罷下り候観音丸と申船之者共ニ蒸氣船御下シ模様者無之哉承り合せ候処、右御船者品川沖ニ而蒸氣釜破損ニ相成、当時修覆中之由、尤大破にて急々ニ者繕ニも相成兼候趣ニ付、当分之下り者有之間敷由之物語り承り候、右ニ付而ハ相待居候ても當時無多ニ滞留仕候姿ニ而入用等も手薄ニ罷成指支候間、一ト先ッ盆前江戸表江立戻り、蒸氣船之模様ヲ承り、彼是手当も仕罷下り度申出候間、御用部屋へも申立候て、彼所方石炭之儀并右虎吉登り之儀江戸同役江相運可申哉相伺候所、其儀可然旨御達ニ付、高橋善衛門方岡本久兵衛方江右等之儀相運候事

但シ綱屋文太儀も右虎吉一同罷登、栄吉へ

内談向も有之趣、夕刻同人申出ニ付御用状ハ文太江相渡候事

同日

一 寺門尚之助方申出候ハ、栄吉代虎吉江戸表ニ立戻登り明日出立ニ御座候所、路用等ニも指支、難渋仕候間何卒御内々金三兩拝借被 仰付候様奉願候旨、綱屋文太ヲ以申出御座候、尤同人江戸方下次第早速相納候趣、且文太受人ニ相立、萬一之節ハ弁納之旨之振り申出御座候趣ニ付、相違も有之間敷無扨儀ニ付、会所掛り之内貸ニ相渡候様寺門尚之助手形にて為相渡候事

七月十日

一 石炭是迄積出シ俵数高六千七拾九俵ニ相成候ニ付、盆前とハ申如何ニも御下ケ金無御座候てハ諸払ニも指支候由、柴田早之助方申出も有之、且大塚吉次郎方も先達方勘定調書も出居、何れも御下金ニ不相成候てハ指支ニ付、右俵数之諸払方勘定調帳相認メ、御用部屋へ入御覧ニ、御下ケ金之儀相伺候処、立替させ難渋為致候も不宜儀ニ候へハ、内金として相渡候様御達ニ付、左之通り当人とも為呼出、御郡方にて寺門尚之助・石川友之助内貸手形にて御金受取置為相渡候事

一 金百兩也

一 同五拾兩也

柴田早之助へ
大塚吉次郎へ

七月十日

一 磯原濱下ケ石炭駄賃錢、最早野口又太郎方指替払ニ相成居、指支候趣ニ而又太郎方申出御座候間、金貳拾兩御下ニ相成候様仕度旨寺門尚之助申出ニ付、内貸ニ而為相渡候事

七月十一日

一 石炭、野口又太郎并緑川岱次郎両河岸江相下ケ候ニ付、緑川へも駄賃錢御渡ニ相成候様仕度、石川友之助

方申出、是亦金貳拾兩内貸ニ而為相渡候事

七月十日

一 石炭俵菰買上之儀、当節藁無之村々ニ而出来方ニ指支候趣申出も有之旨寺門尚之助方申出ニ付、御用部屋へ申立、御家中御扶持之明キ俵為買、夫ヲ取崩シ其藁ニて為出来候様相達、内貸金三兩為受取、御臺所宛夫中間ヲ御徒目付所江申込為出候て為買立候事

七月十二日

一 石川友之助方申出候ハ、先日磯原方積立候石炭船妙法丸平湯江掛り居候て、未タ風見合セ居候由ニ御座候所、粮米ニも指支候趣、何卒金拾五兩也運賃之内前拝借奉願候趣船頭方願有之、依而野口又太郎より申出之振申出候間、無扨内貸ニ而友之助方為相渡候事

七月十九日

一 水三方宿継便ニ而江戸御用状相廻り、左之通申来候事

石炭 公納跡口千貳百俵納済候処、代金四百貳拾兩御下ケニ相成候間、右之内貳百貳拾兩ハ信濃屋和助・松岡屋栄吉両人拝借ニ願、残貳百兩此表江近日御□シニ可相成振申来候事

奉請取御金之事

一 金四百貳拾兩也

但シ七月九日迄節拔

御上納済千貳百俵代

右者御国産石炭代金海軍所方御下渡之分儘ニ奉請取候、已上

慶応三卯年七月十三日

松岡屋 栄吉印

信濃屋 和助

御吟味方

御役所様

七月廿二日

一 緑川岱次郎藏江濱下ケ之駄賃錢払分、同人江御下ケ被下候様岱次郎方仕出書付指出候旨、石川友之助方指出候間、金四拾両也内貸ニ而為相渡候事

七月廿二日

一 昼八ツ半時過江戸表方新組半七宛夫老人指添才料ニ而馬老疋御荷物ニ而石炭代金貳百兩分御金送り、目錄之通り御下シニ相成候ニ付御用部屋へ持參、役所兩人ニ而開封改濟、御金方江御預ケニ相成候事

覚

金貳百兩也 内金百五拾兩ハ 正金

同五拾兩ハ 錢ニ而

此鑑四百三拾三貫三百三拾貳文

右者御軍艦所納石炭代金御下ケニ付、信濃屋和介・松岡屋榮吉上納金、新組半七才料外宛夫中間指添、明十九日指立、四日道中御下シニ付、參着次第御改御受取可被成候、以上

慶応三年卯七月十八日

小泉左治馬印

岡本久兵衛

高橋善衛門殿

吉沢治衛門殿

前書之通御金御指下シニ付、參着次第其筋御役方改受取候様御申達可被成候、已上

根本嘉十郎印

山口六郎衛門

太田新衛門印

国分左大夫殿

七月廿三日

一 高橋善衛門、大塚瀬戸屋見分方石炭山相廻り被帰候事

但シ昨廿二日綱屋文太江戸方下着ニ付、今日石炭山江一同參候事

七月廿四日

一 柴田早之助方繩俵買上代并石炭堀手間払方ニ指支候旨申出ニ付、御用部屋へも申立、左之通り内貸石川友之助手形ニ而為相渡候事

金貳拾五兩也 柴田早之助江相渡候事

鑑貳百五貫文

七月廿六日

一 磯原村緑川岱次郎方御用石炭積八幡丸と申船江相屋候間、何卒金五拾兩也運賃之内拝借願有之候旨申出候段、石川友之助江相達、則金五拾兩也石川友之介之手形押切相渡候事

但シ御用部屋江も右前運賃船頭江渡方願出ニ候趣申立候事

七月廿六日

一 前件申出ニ付積方立合として石川友之助出役ニ相成候事

覚

江戸泉屋三郎兵衛船

松葉印内ニ〇御印在リ 八幡丸船頭善藏乗

一 石炭千三百俵 但シ三俵ニ付老石目積

此石四百三拾三石三斗三升目

但百石目ニ付金三拾六兩割 江戸着渡シ

内金五拾兩也 前運賃積所ニ而相渡シ

江戸深川東平野町

信濃屋和助殿次キ

本所林町五丁目

松岡屋榮吉殿行

右大塚山産 御用石炭今廿六日当濱ニ而積立仕、

前運賃金無相違相渡申候、仍而此段書上申候、已上

上

卯七月廿六日

磯原川岸

緑川岱次郎印

同日

一 石川友之助磯原出役ニ付、先便江戸表方申来候順徳

丸江積送り候石炭八百五拾俵之内、土石交り惡品多分

相廻 公納ニ不相成旨申来候間、野口又太郎積出シ

方如何之儀ニ有之哉、得与相糺候様相達候所者、右者

先年御郡方ニ而堀取候石岡出之石炭、野口藏ニ預り置

候分、当春俵作り替候得とも江戸送り之品ニ者不相成

候故指留置候ヲ、右八百五拾俵同藏方濱出シ仕候ニ

付、人足共心得違、古石炭俵ヲ八百五拾俵之内江六拾

九俵組入持出シ、又太郎儀其儀心不付積立、出帆後ニ

藏改候て相分り、何共奉恐人候旨手綱町宝昌院ヲ以恐

入伺申出候間、御用部屋へ申立候所、江戸表江対シ不

都合全又太郎不行届キ之故、同人方江河岸下ケ之儀者

指留候様御達ニ付、則其段石川友之助方配符ニ而為相

達候事 但シ宝昌院恐入伺之儀者御聞濟ニ相成候事

七月廿七日

一 磯原濱江君沢形老番御船相廻候趣ニ而左之通り申出

書并荷請証文、其外岡本久兵衛方御用状等石川友之助

方指出候間御用部屋へ申立、今日早速寺門尚之助出役

ニ相成候事

覚

廻漕方

一 君沢形老番御船 船頭清吉乗

但石炭五百俵積位

右者蒸氣行速丸御船代りとして積受ニ御指下シニ

相成候趣、只今当浦江着船仕候、此段早速御届ケ

申上候、以上

卯七月廿七日

磯原村

舟横目

野口又太郎印

御用状略写

然者此度蒸氣行速丸御船、来ル十五日二日和次第出帆之

趣榮吉申出候間、則御船送り荷請證文迄通榮吉が船頭江為相渡申候、尤船中之□□申者、其懸り役筋之者兩人乗組候由ニ候間、水主江相渡候事と奉存候、參着磯原方申出ニ而宜御取計可被下候、將又兼而御承知之御武器方御用荷拾九箇御座候由、此度幸之便船ニ付榮吉売荷之積リニ而此度御下シニ相成候間、是亦參着次第御申立、其筋御役方改受取候様宜御取計可被下候、此送り状ハ榮吉名前ニて磯原船庄屋宛之由相達置申候、末文略ス

六月十二日認メ

送状之事

一 箱入箇物 拾九

此運賃金四兩三分也

右者常州松岡綱屋文蔵殿行、前書之通積送申候間、御地着之砌運賃御払可被下候、以上

慶応三年六月

常州磯原濱

野口彦六殿

同 平潟濱

安満屋半兵衛殿

右送り状者佐々又市江相廻シ、右運賃磯原濱方此御屋敷迄之引取駄賃錢等佐々内貸ニ而金五兩也受取、寺門尚之助へ相渡、右荷物取扱方綱屋文蔵同道宜取計候様相達候事

石炭

荷請證文迄通

廻漕方納

一 石炭 千五百俵

右者此度蒸氣行速丸御船為積受御差下シ相成候間、此手形引替書面之通無相違御渡可被成□候、以上

慶応三年卯六月

中山備中守江戸屋鋪

小泉左治馬

常州松岡

高橋善衛門殿

吉沢治衛門殿

岡本久兵衛

右蒸氣行速丸代りとして老番君沢形御差向ニ相成候二付、廻漕方が書状左之通り申来候事

上封包

常州松岡

高橋善衛門殿

吉沢治衛門殿

廻漕方

役所

一筆啓上致候、残暑之砌御座候処、弥御安静被成御座珍重御儀奉存候、然者先般行速丸御船御差向石炭積受可申約定之処、同御船之義ハ火急之御用有之、大坂表江御差向相成候、就而ハ今般君沢形老番御船差向候間、着船次第早速積請相成候様精々御心配被下度、尤同船積高之儀ハ式百石程ニ有之候間、残石炭ハ追々同御船之内を以積取可申手筈ニ付、其節吳々差支無之様御取計可被下候、右申上度如此御座候、以上

七月廿日

廻漕方印

高橋善衛門様

吉沢治衛門様

右返書左之通り指出候事

御書付拝見仕候、如仰残暑之節御座候処愈御勇健被成御座珍重之御儀奉存候、然者先般行速丸御船石炭為御積請御差向之御約定之処、同御船火急御用向ニ而大坂表江御差向相成ニ付、今般君沢形老番御船御差向相成候間、御船着次第積立方之儀精々心得候様被仰聞之趣承知仕候、尤御船積高之義ハ式百石程ニ御座候間、残石炭ハ追々同御船之内を以積取ニ可相成趣是亦承知仕候、此段御請申上度如是ニ御座候、以上

七月廿七日

中山備中守内 兩人姓名

廻漕方

御役所

七月廿九日

一 昼時前、寺門尚之助磯原が帰宅、左之通り積立ニ相成候旨申出候事

覚

松葉○御印付

一 石炭五百俵

但三俵老石目 船頭 清吉乗

此石百六拾六石六斗六升目

海漕方

御用納分

本所林町五丁目 松岡屋榮吉殿行

右大塚山産 御用石炭前書之俵数当濱方今廿八日積立候所相違無御座候、仍而此段書上申候、以上

慶応三年

卯七月廿八日

磯原河岸

緑川岱次郎印

前書俵数積立見届申候所相違無御座候、以上

舟横目

野口又太郎印

同日

一 野口又太郎不調法有之、同人蔵江者石炭下ケ無之様御指止メニ相成候所、手綱町宝昌院ヲ以左之通歎願申出候旨、石川友之助が申出ニ付御用部屋江申立候所御聞濟ニ相成候間、以来屹与心得違無之様可申渡旨御達ニ付、其段石川友之助が為相達候事

乍恐以書付歎願候事

野口又太郎

大塚山 御国産石炭、是迄右蔵江御下ケニ罷成候而積立運送取扱方被 仰付難有仕合奉存候、然ル所去月中順徳丸江積立仕候節、先年方御預り申上置候古石炭下積ニ相成候分、人足共心得違ニ而八百五拾俵之内江六拾九俵濱出シ仕候ヲ不吟味ニ而不心付、其儘積立出帆

後蔵調改相分り奉恐入候処、其段御訴延引ニ罷成居

重々奉恐入候、右蔵江向後石炭御下ケ無御座候旨蒙御達、誠ニ奉恐縮候、斯不調法之身分奉歎願候ハ甚奉恐入候得共以来屹与心ヲ用、間違等無之様精々相勤候間、何分ニモ 御仁恵ヲ以是迄通り石炭御下ケ被下置候様偏ニ奉歎願候旨、拙院迄一向頼有之候間、乍恐此段御聞濟被下置候様私ニおめて奉願上候、依而如件

慶応三卯七月 手綱町 宝昌院印

御国産方 御役所様

卯八月二日

一 石炭濱下駄賃并積立諸掛り等内貸手形石川友之助印ニ而三枚指出候間、払切相渡候面左之通り

一 金九両三分也 石炭千三百俵 八幡丸江積立候諸掛

一 同三両三分也 同断五百俵 君沢形老番御船江積立掛り

右緑川岱次郎江相渡候分 内かし

一 金拾五両也 御用石炭濱下ケ駄賃野口又太郎江相渡候分 内かし

一 鏝百拾貫文

一 金三両也 石炭俵御買上代 内かし

同日

一 江戸表方松岡屋栄吉代虎吉罷下候旨同人申出ニ而栄吉方之書状持参致候事

但シ八月中者積立相休候筈ニ付、便船積合之船ニも無之候ハ、雇船者致不申候様申聞置候事

一 当八月中者時化多之月ニて萬一之儀有之候而ハ指支候間、石炭老艘積之儀者相休候様栄吉方申出候趣、江戸表方兼而申来候事

一 八月中石炭堀賃并濱下ケ駄賃内貸渡分ハ押切帳有之

ニ付略ス

九月朔日

一 江戸表方石炭代金鏝馬三疋付ニ而御下シニ相成、才料新組弥衛門宛夫中間老人添今夜ニ入来着、御用部屋江申立御金方江御預ケニ相成候事

外式百両為替済

一 金百貳拾九両貳分式朱 老朱銀正金

一 錢六百四拾貫文 文久錢ニ而并四百拾老文 天保百文錢はし

右者御軍艦所納石炭代御下ケ金之内、信濃屋和介・松岡屋栄吉方上納分、新組弥衛門外宛夫中間老人差添明廿八日出立指下候条、参着次第御改御受取可被成候、未文略

九月三日

一 前件才料弥衛門ハ病氣ニて願有之、宛夫中間老人明四日立御指戻ニ付、御金受取、目錄御用御印請、御用状ニ而為指登候事

九月五日

一 大内所左衛門此表勝手被 仰付、今夕七ツ時過着之来状之写

前文略

然者海軍所納石炭貳千三百五拾俵代金八百貳拾貳両貳分之内、金七百五拾兩去ル廿日松岡屋栄吉御呼出ニ而御下ケ金御渡ニ相成、直様同人同日夕刻持参ニ付相改、兼而栄吉方願之通御用部屋へ申立、内金四百兩此方へ納分請取、残金三百五拾兩者同人江相渡申候、右金高之内貳百兩文久錢ニ而当日市中相場を以千八百貳拾貫文御渡ニ相成申候、右者此節 公辺ニ而も殊之外御金詰リ之趣、依而不残も錢ニ而御渡ニも可相成之御模様ニ御座

候ニ付、栄吉彼是願立其筋江も扱等頼込候由ニ而

高之内五百五拾兩者老朱銀等ニ御下ケニ相成申候、扱右錢者貳百兩分ニ而兩替屋江遣候得者、老

兩ニ付三四百文安スニ無御座候而ハ引替ニも相成兼指支申候、不殘錢者栄吉江相渡度与申聞候得

共、是も不殘ニ而ハ甚難渋之趣ニ御座候間、大体

金高ニ応シ百兩分を栄吉へ相渡シ、百兩分者四百兩之内江請取申、御用部屋江申立、何れ其表へ先

ツ半分也金子一同御指下シニ相成候様申立置候事ニ御座候、前書金四百兩其表江御指下シニ可相

成分之内、貳百兩ハ先便為替受取手形御指下シニ付、此表御當用江元組申候、殘金貳百兩ハ錢交

リニ而其表江御達次第御指下之積ニ御座候、未文略ス

九月五日

一 大塚山石炭堀場是迄之所品不足ニ罷成、且惡石炭計リ多く出候様ニ相成、撰堀ニ當時仕居候得共、可相成者脇場所ニ而宜敷石炭出候所も有之候へハ申出候様兼而早之助へ相達置候所、足立内坪市蔵と申者之苺敷山ニ能キ品有之様子、石炭堀共も申出候趣申出ニ付、御用部屋へ申立弥見分之上、上石炭出候所ニも候ハ、右苺敷山御引上、外山野地と御引替、市蔵へ被下候様申立候所、其段御郡奉行江も御達ニ相成、則今日高橋善衛門・寺門尚之助一同右場所江罷越見分致候所、石炭随分上品殊ニ沢山出可申候見受候ニ付、弥御用山ニ相成候旨村長大塚吉次郎江寺門尚之助方相達、受書取、夕刻帰宅、右之段御用部屋へ申立候事

大塚村

持主

一 苺敷山八反歩位 市蔵

前書之山ニ石炭御座候ニ付、此度御国産御用御堀取ニ相成候御達之趣、当人者不及申上村役人共一同奉畏候、依而書付奉指上候、已上

慶応三年

卯九月

右村 長 大塚吉次郎印
庄屋代門馬彦九郎

組頭 豊田源助

同 鈴木善次郎

同 弥衛門

一 苧敷山新開キ之儀、追而跡納石炭俵数江戸表より申来候次第ニて為堀初立候事ニ候得とも、先ツ右場所開キ候諸懸り積り指出置候様柴田早之助へ相達、書付為出候事

覚

一 人足拾貳三人掛り

是ハ足駄内石炭山出シ道造り賃、本道迄通用之道積り 老工ニ付老米ニ米老升ツ、

一 人足

三人位方

五人位 掛り
是ハ石炭山敷口附手間人足積り

右之通り書上ケ申上候、以上

石炭堀

卯九月

吉 藏

一 磯原濱へ石炭置場小屋、是迄柴田早之助一手ニ而出来置候所、右者御用石炭御入ニ就而ハ御買上ニ被成下候て、代料御下ケ被下度旨申出有之ニ付、何程造立入用相掛り候哉調指出候様相達候処、左之書付指出候事

覚

磯原濱藏普請入用

金拾七両壹分七百五拾文

わけ

金五両七百文

杉皮貳百四拾五両
但兩ニ四拾八間直

同 老両也

たる木三拾四本、老丁貳百文ツ、

銀五貫六百文

貫拾八丁 老丁貳百文

老両三分五百文

附役百八拾間、老枚七拾貳文ツ、

百文

縄代

五貫五百文

四寸釘貳拾わ

老貫八百三拾貳文

磯原より買釘代

四百拾六文

釘代神岡方買

五貫文

材木代

老両也

同

老両貳分

背板廿八間

三両也

職人拾五人扶持作料地引代とも

ベ金拾三両壹分銀貳拾七貫九百五拾文

右之通り

一 石岡山觀音柵石炭堀立中諸懸り調、大塚吉次郎方八月廿八日指出候間、惣引切勘定殘金九両銀貳百拾六文為相渡候事

但シ本手形仕抜キニ相成、委細証拠付ニ而石炭諸松押切帳ニ相記候故爰江略ス

九月十一日

一 石炭代金銀御下シ才料弥衛門病氣全快、明十二日出立登りニ付、御用状并石岡山石炭仕抜キ御益金相立候調、尚又是迄江戸表江積立俵数高代金付御下シ金高ニ而指引不足金、將又是迄内貸金渡払高等延紙横綴帳老冊江戸役所江相廻候事

但シ御用部屋へも入御覽為指登候事

九月十四日

一 柴田早之助方石炭堀賃等山掛り入用御下ケ金願申出候旨ニ而石川友之助印ニ而内貸手形指出候間、左之通御金方より為相濟候事

一 金貳拾兩也

銀貳百貫文

但シ江戸方御下シ之文久錢ニ而渡ス

九月十七日

一 柴田早之助試堀之内、同人方御用分ニ納候俵数并御用御引上ニ相成候俵数調為指出候処、突合不申相分り兼候廉有之候間、御用部屋へ申立、高橋善衛門今日磯原江罷出、野口・緑川両方之元帳書拔調為出候て夕刻帰宅致候事

同日

一 昨日柴田早之助方申出候ハ、先日御下ケニ相成候文久錢石炭堀職人共江堀賃等相払候処、此節他領者文久錢六文之通用ニ候由ニて、中ノ郷筋ニ而ハ貳三百文位之端銀ならてハ右錢受取人無之、酒老升相求候ニも右錢計リニ而ハ価ニ受取不申候故、職人共難渋之趣ニ付、何卒金老分分位丈ケハ右文久ニ而御預候様中ノ郷村々江御達被下候様願申出候間、御郡奉行江申談シ御達ニ為指出候所、御郡方役所ニ而如何之聞違ニ候哉金老朱分迄ハ右文久ニ而受取候様ニと相達候趣ニ有之候事

九月廿日

一 前件文久錢通用之儀御郡方方御触ニ相成候得とも、老朱分迄通用ニ而難渋之由ニ而左之願書指出候間、御用部屋へ申立、一旦御郡方方達ニ相成候儀候間、譬間違ニ而も今更達直シと申儀も相成兼候半間、右江戸方御下シ之文久者老兩九貫百文相場ニ而御下シニ相成候銀故、此表時相場方三百文兩分ニて延安ス相場ニ致シ御下ケニ相成候ハ、夫ニ而職人共も如何様ニ欺被遣可申候事ニ付、安相場ニて相成候様仕度御用部屋へ相伺候所、其通取計候様御達ニ相成候間、文久錢者兩二三

百文延相庭ニ而相渡候間、其旨相心得候様柴田早之助
代綱屋文太江相達候事

乍恐以書付奉願上候事

一 当節文久錢鉄四文錢等不通用ニ相成居候処、御用
石炭堀賃并繩菰代諸払方ニ当十四日ニ文久鏢貳百
貫文御下ケ被下置候ニ付、職人共江も勘定相立候
所、此節五百文以下之取引通用致候様新ニ御達ニ
相成候而者職人共日用之遣向ニも指支、第一繩菰老
駄ニ付三貫五六百文方四五貫文位之払方ニ相成候
所江、五百文ツ、相渡候様ニ而者何れニも指支候
間、向後御下ケ之儀者文久錢并鉄四文錢相除、外金
錢ニ而御下ケ被下置候様奉願上候、又者四五貫文位
之通用ニ相成候様御達被下置候共御賢察被下置、
兩様之内御聞濟通用宜敷様御仁惠之段偏ニ奉願上
候、仍而如件

慶応三年卯九月

柴田早之助印

御勝手方

御役所様

九月廿六日

一 柴田早之助、磯原江作立候石炭積小家代金、早之助
江可相成事ニ御座候得とも、先日緑川岱次郎方小家掛
ケ仕候内者石炭御下ケ無之様ニと山元会所江申越候趣
ニ付、小家者何れ江掛ケ候積リニ有之候哉、早々出来
ニ不相成候てハ石炭山ニて俵損ニも相成候間、何れ江
成早様出来候様為申聞候所、柴田早之助之作立候小家
者 上ニて御引受ニ相成候小家之由ニ承知仕候間、右
小家御払ニ被成下候ハ、右小家之南江作り足シ小家掛
ケ仕候得ハ早速ニ出来候儀ニ御座候間、何卒御払ニ奉
願度旨申出候ニ付、其段御用部屋へも申立、石川友之
助方其段御払之儀緑川岱次郎へ為相達、早々小家作足

候様為致候振り相成候折柄、野口又太郎此表江罷出、
右小家御払之儀緑川江御払ニ而ハ指支候旨石川彦一郎
江申出候趣ニ而、彦一郎善衛門宅江参り申出候ハ、柴
田早之助作置候小家有之土地者先年野口又太郎物置相
立願ニ付役所方私出役、土地改相済候積リニ候所、緑
川岱次郎庄屋相勤候内ニて同人村故障之意味申出、無
抛野口又太郎江相済不申土地ニ有之、只今ニ相成緑川
岱次郎御払受右土地江指置候而ハ役所ニ而甚指支候趣
申出候間、左様ニ候得ハ野口又太郎此節他領石炭者
上之土地方ニ相成居候右小家方北筋江二三棟建日々受
込、上之石炭ハ置場□無之趣申立候段甚不相当之儀ニ
有之間、早々他領石炭ヲ受込候為メ、上之御土地江無
断ニ而立置候小家為取払、緑川岱次郎小家掛可仕願も
有之儀ニ付、右他領小家引払候跡江小家掛ケニ為致度
彦一郎へ申聞ケ、御郡奉行江も其段相談候所、野口又
太郎江右小家取払相達候趣之所、同人方歎願も有之哉
ニ而御郡方ニ而中済致シ、柴田早之助之作立 上ニて
御引受ニ相成候小家ヲ御郡方ニて御払受ケ、其脇南之
方へ早速小家作り足、是又御郡方ニて出金、右場所之
小家者都而御郡方持ニ致度旨御郡奉行申聞ケ旨彦一郎
方申出候間、其儀ニ任セ候事

但シ右御郡方持ニ相成候小家之儀ハ野口・緑川双方

ニ而好ミ候場所故、世話方老人江為任候様ニ而ハ
ひいき之沙汰ニも可相成間、野口・緑川両方江
相下ケ候石炭何れも無差別而人扱ニて取込置候
様致候得ハ何等次第有之間敷、彦一郎へ申聞、
其通り御郡奉行も承知ニ相成候事

十月四日夜五ツ時水三方御飛脚、新組直助宛夫中間老人
才料持参ニて、石炭代金御下シニ相成候事

但シ山口六郎衛門殿、去月廿五日江戸出立被下
候所、三ノ丸江御用向ニ而相廻、此表下

着延引ニ相成候故、態々水三方右兩人御飛
脚ニ而御廻ニ相成候事

石炭代

一 金四百両也

信濃屋和介
松岡屋栄吉納

右御金明廿五日山口六郎衛門殿御用下り出立被致候
ニ付御頼、御指下ニ相成候条、参着次第御改御受取
可被成候、右御金送目録老通御用部屋江指出候間、其
御筋方御落手御承知可被成候

御用状略

但シ御金早速国分左大夫殿宅江持参、役所兩人ニ
而改、御金方江御預リニ相成候事

一 前書松岡屋栄吉等此度石炭代上納候、就而ハ其表方
是迄御運送分御調帳先便御指下シニ付、栄吉江披見為
致候所、猶又同人方右之俵数代金訳書等御取調差出
候間、則別紙其儘相廻申候、御落手宜御算当被下相
違も無之候ハ、是迄之運賃前借等不殘御指引、殘金
之儀者跡石炭代之内江御受取置可被下候、公辺御下ケ
金も当月晦日迄ニ御下ケ願置候由、何れ来月中旬迄
ニ者御下ケ金御座候半与奉存候、御下ケ次第第二猶又代
金御指下ニ相成可申候、悪儀之六拾九俵も丸ニ捨リ与
申ニも無御座候間、相働キ老俵五匁宛ニ取調候旨、
尤以後悪儀を急度五匁ツ、ニ御引受与申事ニ者指支候
よし、第一下品為御登ニ而者運賃損ニ御座候間宜御承
知可被下候、先日久兵衛儀廻漕方役所加納治郎作江面
談仕候処、同人申聞ニも向後石炭積受御船を相廻候
ニ付而ハ、石炭品之儀ハ山方江巧者成者御附置、兎角
上品而已撰御俵造ニ被成候様仕度、下品交リニ而候得
者蒸氣ニ而炊焚候節火付悪しくもへ兼候間、無抛肥前
唐津等之極上之石炭「」為焚候事ニて自然直段
も下直ニ相成候、左候得者運賃も損ニ相成割合不宜趣

ニ御座候、兼而右等之儀御心得之事ニ者御座候得とも、猶又其筋懸り之者等へ御教諭被下度奉存候、此度之納金ニ而是迄之分御益迄も御取調ニ相成候ハ、一御調御座候様仕度奉存候、末略ス

松岡屋栄吉調書老冊左之通り

覚

卯三月廿八日方七月廿八日迄積立
同四月廿四日入津方八月七日入津迄

一 石炭八千貳拾七俵也 追々入津高

代金九百九拾七兩壹分ト拾貳兩三分八厘

内訳

七千六百貳拾俵也 上俵老俵ニ付

代金九百五拾兩壹分也 銀七匁五分宛

三百三拾八俵也 経俵老俵ニ付銀七匁三分六厘

ツ、

代金四拾老兩壹分ト拾貳匁三分八厘

但シ石岡山分初堀之節人足心得達ニて

老貫目宛輕俵作り立之分

初荷入津ニ付祝儀として五百目勘

弁致、差引残五百目不足直引

六拾九俵也 下品老俵ニ付銀五匁宛

代金五兩三分也

但シ野口心得違ニ而古俵積立之由御申送

ニ候処、当方江者凡百五拾俵も相見

得候へ共、右御申廻ニ付外惡俵ハ

納方ニ而入合有之候

一 金貳百拾四兩三分ト貳匁九分

運賃前金御工立替分元利

内訳

元金四拾貳兩三分也 四月中日和丸・順栄

丸・權現丸

利金貳兩貳分三匁九分 四五六七八九六ケ

月分

元金五拾兩也 五月中福寿丸・順栄丸

利金貳兩貳分也 五六七八九五ケ月分

元金拾兩也 六月中順徳丸

利金壹分ト五匁 六七八九四ケ月分

元金百五兩也 七月中大栄丸・妙法丸・八

幡丸

利金三兩ト九匁 七八九三ケ月分
御上納可仕分
二口合

金千貳百拾老兩三分ト貳分八厘ハ高

金百兩也 当卯二月中前金として上納仕

候分

金三兩也 有利足二三四三ケ月初舟入津

月迄利分

金九百兩也 六月六日上納より八月廿一日

迄追々五度ニ納

右合千三兩也

指引ハ金貳百八兩三分ト貳分八厘 上納分

右栄吉調前運賃貸立替金之利貳拾五兩江壹分之利合

ニ相見候間、此表ニ而ハ老割利合ニ而借入候金子ニ

付、右前金貸分老割ニ而勘定相立、残金者石炭代跡

口江相廻候旨江戸表江十月六日仕出シ、九日 御

城便江相運候事

十月八日

一 山口六郎衛門殿、昨七日夜水三出立被致、今八日屋

八ツ時前下着被致候事

覚

廻漕方

一 君沢形老番御船

右 御用石炭積受として御指下シニ相成、今八日

夕当浦江着仕候、則御別紙持参仕候間御届ケ申上

候、以上

十月八日

磯原村
舟横目
野口又太郎

覚

廻漕方納

一 石炭 五百俵

右者此度君沢形老番御船為積受御指下相成候

条、此手形引替書面之通無相違御渡可被成

候、已上

海漕方

昇平丸御船

右者 御用石炭為積受御指下シニ相成、今十二日

当浦江着仕候、御別紙持参ニ付則御届申上候、且

中山備中守内

江戸屋鋪 小泉左治馬印

岡本久兵衛印

慶応三年卯九月五日

常州松岡

高橋善衛門殿

吉沢治衛門殿

右石川友之助方指出申出ニ付、御用部屋江申立、早速

石川友之助出役積立改致候事

一 右出役ニ相成候所、九日方十日迄ニ積仕舞、夕刻友

之助歸宅、別紙指出候間御用部屋へも相届ケ候事

覚

松葉印○御印付 君沢形老番御船

一 石炭五百俵 但シ三俵ニ付 船頭清吉乗

老石目積り

此石百六拾六石六斗六升目

海漕方 信濃屋和介殿次キ

御用納分 松岡屋栄吉殿揚

右大塚山座御用石炭前書之俵数当濱方今十日

積立仕候処相違無御座候、仍此段書上申候、

以上

慶応三年卯十月十日

磯原村

前書俵数見届ケ申候処相違無御座候、以上

舟横目 緑川岱次郎

野口又太郎

十月十二日

一 別紙之通磯原方申出候旨石川友之助方申出候間御用

部屋へ申立、明十三日石川友之助出役ニ相成候事

覚

海漕方

昇平丸御船

右者 御用石炭為積受御指下シニ相成、今十二日

当浦江着仕候、御別紙持参ニ付則御届申上候、且

積立之儀「」場所不宜解船運兼申候、尤此天氣模樣ニ御座候得ハ、明日者平波ニ相成可申と奉存候所、大俵ニ付御船手ニおゐて急キ之ふり申聞ニ御座候間、明朝海上次第御出張御待不申上、積初立候様仕度奉存候、此段乍恐以書付奉申上候、以上

十月十二日

磯原村舟横目
野口又太郎

覚

海漕方納
一 石炭 三千俵

右者此度昇平丸御船石炭為積請御指下シニ相成候条、前書之通無相違御渡シ可被成候、以上

慶応三卯年九月

中山備中守
江戸屋鋪
小泉左治馬印
岡本久兵衛印

常州松岡

高橋善衛門殿
吉沢治衛門殿

十月十三日

一 今早朝石川友之助磯原江出役致候所、海上不宜積立相成不申、何れ波向直り次第訴申出之趣船横目申出ニ付、一ト先引取候旨ニ而夕刻帰宅ニ相成候事

十月十六日

一 昨夜磯原方昇平丸江積立今朝方初候旨申来候間、出役致候趣ニ而石川友之助罷出候所、元船遠方ニ掛り居、解下も手間取、漸廿一朝迄ニ積切ニ相成、同日出帆ニ相成候由ニ而廿一日夕帰宅、別紙書付指出候事

但シ大塚・日棚・石岡瀬戸荷、野口又太郎へ相下ケ置候分、船頭江懸合為積候旨是亦申出候事

覚

廻漕方御用納
松葉印ノ内○御印有
御用石炭千五百俵
此石五百石目 但シ三俵ニ付石目積り

昇平丸
喜三郎乗
深川東平ノ町
信濃屋和助殿次キ
本所林丁五丁目
松岡屋栄吉殿行

右大塚山産 御用石炭今廿日当濱ニ而積立仕候所相違無御座候、仍而此段書上申候、以上

慶応三年

十月廿日 磯原
緑川岱次郎

前書之通俵数積立仕候所相違無御座候、以上

卯十月

舟横目

野口又太郎

覚

○印松葉付
一 石炭千五百俵 但三俵ニ付石目積り
此石五百石目

廻漕方御役所 江戸深川東平ノ町
御用納分 信濃屋和助
松岡屋栄吉揚

右御国産御用石炭前書之俵数今廿日当濱ニ而無相違積立仕候、依而書上申候、以上

慶応三年

卯十月 磯原村
船横目野口又太郎

十月廿七日

一 夜五ツ時過、水三方河合新之助帰宅便ニ相廻候御用狀左之通申来候間、御用部屋へも「」事

書添得貴意候、然者此表ニ而上納ニ相成候石炭御益金之儀、兼而松岡屋栄吉江相達置候所、此度其表方之御調面を以八千貳拾七俵口別紙之通取調、金百四拾兩銀四匁指出候間、則御用部屋江申立候所、石炭御益金之儀ハ其表御元方江御指下シニ相成候旨御達ニ御座候

所、態々之御飛脚程ニも無御座候様奉存候間、此節時々為御登金も御座候ニ付、為替ニ組候而も可然旨御達ニ御座候間、此段御承知可被下候、右之段得貴意度如此御座候、以上

卯三月廿八日積立方
七月廿八日積立候迄
同四月廿四日入津方
八月七日入迄
覚

一 金百四拾兩ト銀四匁也

八千貳拾七俵口
御益金ハ高

内訳

金貳拾四兩壹分ト銀四匁 四月廿四日入津方壹番
六番入津迄
千四百五拾九俵
御益老俵ニ付銀壹匁宛
七番入津より九番迄
貳千百俵

同四拾貳兩也

御益老俵ニ付銀壹匁貳分

同三拾九兩也

拾番入津方十一番入津迄
千九百五拾俵
同断老俵ニ付銀壹匁貳分

同貳拾六兩也

拾貳番入津
千三百俵
同断老俵ニ付銀壹匁貳分

同八兩三分也

同 六番船入
千五百俵也
同断老俵ニ付銀五十分

但八千貳拾七俵御積立之内、百六拾俵豊吉丸積海中捨り荷物之分御益御用捨願ニ付、差引七千八百六拾七俵分

右上納「」候事

江戸
吟味方

右之通り栄吉方相納候分松岡江御下シ、石炭御入用元金江為御入レ候之江戸「」結構之儀ニ御座候得とも、此表者老俵七匁五分代方諸懸リヲ引、残ヲ御益ニ仕候而も追々御元金出来可申事ニ付、江戸表江栄吉方直納之御益金者江戸表江御指置ニ而其内方石炭之儀ニ付御軍艦所等江之御附届ケ向、又者御屋形江御益御指上金等之御払分之御備ニ仕度様ニ奉

存候旨同役相談之上、御用部屋江申立置候事

十月晦日

一 山口六郎衛門殿、瀬戸屋并大塚石炭山見分とし被越候ニ付、高橋善衛門・佐々又市・石川友之助出役、石打場方廻り初、夕暮時帰宅ニ相成候事

但シ例之通り腰弁当持参之事

十一月三日

一 江戸表方関根清蔵夜五ツ時過下着、兼而江戸役所方申来候栄吉方納候石炭御益金百四拾両銀四匁被頼持参之旨ニ而御用金箱入指出候間、御用部屋へ入披見御金方江相廻置候事

但シ六日仕出し御便江此御益金返却之儀問合
せ相運候事

覚

東上総岩和田村

重介船

一 石炭貳百五拾石目積 春日丸 沖船頭平吉乗
但シ百石目ニ付運賃金三拾九兩割

内金貳拾兩也 前金拝借願

右者今三日昼頃当浦着船、懸船仕候ニ付、早速雇方之者指出シ掛合罷在候所、松岡屋栄吉代寅吉幸乗り合、前書之通り雇船仕候、積立之儀ハ風波次第今夕方ニも積初立候様可仕候、前運賃積所拝借金之儀者明四日御下ケ渡被下置候様奉願上候、且過日寅吉方方奉申上候平潟入津仕居候不動丸、同湊今朝出帆仕り候得とも風あしく大津浦迄参り懸留居候様相見江申候、此段以書付御届ケ奉申上候、以上

卯十一月三日

磯原村船横目

野口又太郎

右申出之趣寺門尚之助申出ニ付、御用部屋へも申立、同人出役ニ相成候事

覚

松葉印内○御印在り

一 石炭三百拾八俵 春日丸平吉乗

但シ三俵ニ付老石目積り

運賃百石ニ付金三拾七兩割

海漕方御用納分 深川東平ノ町

信濃屋和介殿次キ

本所林丁五丁目

松岡屋栄吉殿行

右者大塚山産 御用石炭今四日当濱方積立仕候、此段書上申候、以上

慶応三年卯十一月四日

磯原村

緑川岱次郎印

前書之儀数無相違見届ケ積立仕候、以上

十一月

舟横目

野口又太郎

覚

○御印付松葉付

一 石炭四百三拾貳俵 春日丸 沖船頭平吉乗

但シ三俵老石目積り

此石百四拾四石目 但シ百石目ニ付 運賃金三拾七兩割

内金貳拾兩也 積所ニて貸渡シ

残運賃金之儀ハ江戸着渡定

廻漕方御役所 江戸深川東平ノ町

御用納品 信濃屋和介

松岡屋栄吉 揚

右御国産 御用石炭前書儀数当濱方今四日無相違積立仕候、依書上申候、以上

十一月四日

磯原村舟横目

野口又太郎

覚

○御印松葉付

一 石炭四百七拾貳俵 不動丸 舟頭佐四郎乗

但シ三俵老石目

石ニベ百五拾七石三斗三升目

但百石目ニ付運賃金三拾八兩割

内金拾五兩也 積所ニて貸渡申候

残運賃金之儀江戸渡し定

外ニ金三兩ツ、舟中江酒代

廻漕方御役所御用納品

右御国産 御用石炭当濱方前書儀数今六日積立仕候、依而書上申候、以上

十一月

野口又太郎

松葉印ノ内○御印在り

一 石炭五百貳拾八俵 不動丸 左四郎乗

但シ三俵老石目積り

此石百七拾六石目 運賃百石ニ付金三拾八兩割

外ニ船中酒代

廻漕方御用納分

宛名前同断略ス

右者大塚山産 御用石炭今五日当濱方積立仕候、此段書上申候、以上

卯十一月

磯原河岸

緑川岱次郎

覚

一 金四兩壹分貳朱ト銀六分 春日丸平吉乗

延銀七拾七文

石炭三百拾八俵

積立入用

一 同三兩三分貳朱ト銀五匁壹分 不動丸 左四郎乗

延銀六百七拾七文

石炭五百貳拾八

俵右同断

一 金六兩壹分ト銀七百五拾八文 但シ老俵四分五厘ツ、

右之通り船積入用金御下ケニ相成無相違御受取申上候、以上

卯十一月六日

緑川岱次郎印

覚

一 金三兩貳朱ト銀九百拾九文 石炭四百三拾貳俵

春日丸 江積立懸り

但シ老俵四分五厘ツ、

一 同三兩貳分銀三百拾九文 石炭四百七拾貳俵

不動丸 江右同断

一 金六兩三分銀貳百三拾八文 但シ金壹分ニ付銀貳貫文相場

右者御国産石炭当濱方両艘江積立掛り金無相違御受取申上候、以上

卯十一月

野口又太郎印

辰正月元着

十二月廿四日認江戸御用状ニ而申来ル

前文略

然者松岡屋栄吉方追々は迄入津ニ相成候石炭代金等調書差出候間、別紙老枚相廻申候、御落手之上御承知可被下候、若相違之儀も御座候ハ、栄吉儀来正月五日方此表出立罷下候積ニ御座候旨申出ニ御座候、其節萬端御申談可被下候、右調書之面少々過金ニ相成候得とも、其後追々御濱下ケ之俵数も多分之儀前金式百両上納仕候旨申出候間請取、御用部屋江申立幸便指下候心得ニ御座候、中略ス、尤非常御入用「」相成不申委細者此御用部屋方御運、其表御達ニて御承知可被下候、右ニ付前書栄吉より上納金式百両ハ為替ニ御仕組可被下候、末略

江戸吟味兩人

覚

一金式百貳兩貳分 八千貳拾七匁口卯九月中

御仕切殘金

一金六百五拾六兩壹分

昇平丸 君沢形・春日丸 不動丸石炭五千貳百五拾俵代金老俵ニ付七匁五分宛

一同三拾五兩也

不動丸・春日丸前運賃御立替返金分

一同貳分ト拾貳匁也

右御利足

金八百九拾四兩壹分ト銀拾貳匁

内金四百兩也 卯四月上納

同 三百拾貳兩貳分也 同十一月九日上納

同 貳百兩也

同十一月廿八日上納

惣金九百拾貳兩貳分也

指引

金拾八兩ト銀三匁

過上納分 御前金ニ成ル

右之通りニ御座候、以上

丁卯十二月廿三日

松岡屋 栄吉印

御吟味方

御役所様

十二月廿日

一 左之通り兩人方□出候間御用部屋江申立候所、御郡方御用向ニ而罷出候節昼食代銀八拾文ツ、相払候儀ニ付、右同様相払候ハ、村傷ニ者相成申間敷候間、其振取扱候様御達ニ付其旨相達、野口又太郎并石岡大塚吉次郎等兩方方為仕出候様可致申聞ケ候事

覚

一式拾貳 磯原村

右御国産石炭積立立合之節、泊り之儀者小払初之内ニ而被下置候得ども、昼食之儀者前書之通ニ相成候处、御定之通指置候而ハ村傷ニ相成誠ニ難渋之儀ニ御座候間、昼食之儀思召ヲ以老ト賄何程宛と御定、当暮御下「」被下置候様奉願候、以上

卯十二月

石川友之助

寺門尚之助

一 大塚村足田内新石炭山御開キニ相成候所、牛馬通行之道新規ニ付ケ不申候てハ持出シ相成兼候場所ニ付、

右道代積り見分致シ、人足ニて出来候様寺門尚之助へ相達指出候所、左之通り田地ニて道代ニ相成候間、此分永引ニ相成候てハ御取高江拘り候故、来暮ニ至り左之道代書面御年貢分江少々宛も思召ヲ以被下、足代錢ニて御下ケ被下候得ハ故障無之旨申出候間、其旨御用部屋江申立置候事

覚

東下原

八

一 下田老畝式拾四步

地主八十衛門

内拾八步

道代ニ成ル



慶応3年4月13日の条

一同 下々田老畝式拾八步 七 地主栄七

内老畝步 右同断

一 下々田老畝拾九步 六 地主富重

内式拾四步 右同断

ろ 原林 廿 地主栄七

下々田老畝拾步 右同断

田畝合六畝式拾五步 内三畝步 道代ニ成ル

卯十二月

寺門尚之助

慶応四年正月（三月）水戸藩中山氏石炭御用留

（茨城県立歴史館蔵 高橋キヨ家一八七九 竖帳）

（表紙）

慶応四年

石炭御用留

戊辰

正月 吟味方

正月十七日

一 江戸表方松岡屋栄吉下着、旧冬中石炭之儀ニ付、苗字帯刀 御免被 仰付候御礼申出候事

正月廿三日

一 大塚芦田内新石炭山為見廻松岡屋栄吉同道高橋善衛門罷出候事

正月廿四日

一 当春方積立江戸納石炭之儀者は迄磯原渡シ壹俵代銀七匁五分宛ニ候所、増銀五分足シ、都合壹俵代銀八匁宛ニ而松岡屋栄吉引請候約定ニ取極メ、明廿五日出立、江戸江罷登候事

覚

○御印松葉印

大栄丸

一 石炭四百五拾俵 但三俵ニ付壹石目 船頭久兵衛乗

此石百五拾石目

但シ百石目ニ付運賃金四拾貳兩割

外ニ金貳兩ツ、水主共江酒代、江戸着渡リ之約定

江戸本所林丁五丁目

松岡屋栄吉

同深川東平ノ町

信濃屋和介揚

右者大塚山産御用石炭前書之通り無相違積立仕候、以上

慶応四年辰三月十四日

磯原村

船横目

野口又太郎

（以下余白）

（参考）慶応元年正月 幕府海軍蒸気船燃料石炭掘取方

その外見込取調書

（神谷大介『幕末期軍事技術の基盤
形成―砲術・海軍・地域―』所収）

蒸気御船遣石炭掘取方其外見込之趣取調申上候書付

（勘定奉行 正之）

松平対馬守

（勘定奉行 康正）

松平備中守

（軍艦奉行 忠順）

小栗上野介

（軍艦奉行並）

木下謹吾

（軍艦奉行並）

石野式部

（勘定吟味役 広胖）

小野友五郎

（勘定吟味役 忠義）

岡田安房守

御軍艦所御預蒸気船御船々、航海遣石炭之義は、是迄

江戸表町人共所持之品等御買上に付、多分之御入用高

に相成候間、山元に於て御買上之上、御軍艦所え貯置

候様仕度義等、去る戊子^{（文久二年）}月中、別紙写之通、御軍艦奉

行井上信濃守他老人より相伺候処、共通可取計旨、

去々亥三月に至り脚下知御座候得共、右にても永統之

御仕法に無之、且都合之廉も御座候に付、尚篤と一

同勘弁仕候処、石炭之義は、蒸気御船には一日も不可

欠要品にて、当時之御船数丈にても不絶百万斤余は必

御軍艦所え御貯無之候ては、差掛り候御用筋は勿論、

非常之折柄差仕候に付、御軍艦所え御貯方等之義は、

別紙脚下知済之通にて可然候得共、一体石炭之義、御

軍艦所御預り御船々遣并諸家所持蒸気船遣之分丈け山

元より堀取、商人共売買致し候義には無之、相互に利潤を競ひ銘々御開港場え持出し、外国船へ売捌き候

方、御国にて遣払候十倍にて当り可申哉にて、横浜耳

にても壹ヶ年大凡千五百万斤は商人より売渡し候趣に

付、長崎・箱館共、合せ候得は壹ヶ年大凡三、四千万

斤程は売渡し可申、右之利潤は悉皆姦商共之所得に相

成、御益には更に相成不申、素々石炭之義は蒸気御船

必用之品に候処、御国内出產之石炭、猥に外国人え高

価に売渡し候より、御船遣も夫につれ高直之品御買上

に致し候様に成行候様に付、石炭売捌方等之仕法、睨

と不相立候ては、直安之石炭御船々え遣廻し候訳に至

り兼候に付、石炭之事に付ては、以来都て御勘定奉

行・御軍艦奉行え御委任相成、御料・私領之無差別、

石炭産出致候場所には石炭掘取り、切出候迄、都て御

勘定奉行之持と相定、たとひ百姓持山に候共、不殘御

手山に被仰付、相当に御手当被下、御勘定奉行・御軍

艦奉行之免許無之内は、勝手に掘出し候義は決て不相

成事と取極め候方と奉存候得共、方今之形勢私領所迄

手を下し候は容易之義に無之のみならず、領主等之氣

配に拘り候ては以之外に付、私領所より出產致し候石

炭山堀取方、売捌方は、先是迄之通に致し置、差向御

料并万石以下之知行所より出產致し候石炭山之分は揮

て御手山に被仰付、石炭出進之高に應し村方え相当之

御手当被下、右山は御勘定所にて進退仕候様被仰渡堀

取方、津出等、同所にて取扱、船積等之儀は其場所之

模様に従ひ、御勘定所・御軍艦所両手にて取計、右脚

手山に被仰付、出產之石炭捌方等之權は御軍艦奉行え

御委任相成候積被仰渡候様仕度奉存候

一 御料并知行所等より出產之石炭、譬は常州辺より出

候品にて、右山は百姓持山に候とも、石炭出產中は

直に御手山に被仰付候は、御勘定所持と致し、其

場所に候石炭掘取切候迄は、同所役々之内差出し置、相当之賃銀差遣し候積にて、村方等より人足雇揚、堀取方致し、最寄河岸場え石炭置場補理、右え為持込置、御軍艦所に於て石炭入用之節は、其段直に其所詰合之御勘定方等え申達し、御軍艦所附御船、或は廻船等にて江戸表え積廻し候積

但、其所之村役人共のみにて御用弁差支候場所は、御用達様之者相撰、詰合として被差遣候役々と一同に其所え差遣し候様取計候は、充分御用弁相成候義と奉存候

一 前条に申上候儀は、御軍艦所遣ひ石炭積廻し方之仕法丈にて、外国人え売捌方仕法之義は、譬へは横浜表石炭会所・石炭置場とも取建、右は御軍艦所一手持といたし、御軍艦奉行支配向之者両三人并御用達様之者为相詰置、前条申上候御料所等より出産之石炭、御軍艦遣を引去り、残は横浜表え積廻し、右置場所え貯置、同所渡来之外国船、石炭買受度旨申立候節は元値段勘弁之上売渡し候積、尤値段取扱之義は一概に利潤を多分に相懸け売渡候ては、外国人共より必苦情申立、右之仕法も打破れ候訳にて、既に先年長崎表製鉄所附石炭、外国人え売渡候節、多分之利潤相懸け候故、遂に不破行事に相成、右之覆轍も有之候間、御軍艦方より売渡候石炭代之義は、商人共より直売致し候石炭代より百斤に付忖或は忖勿つゝも直安に売渡し候積を以堀取方より津出し、船積、海上運送賃、会所入用諸掛りとも込め候元値段、百斤に付何程敷に当り候所え、利合五分敷、忖割敷、相増売渡候様に仕候は、儲次第に姦商共より直売致し候より、彼方に於ても直安に品買取候儀出

来、此方にて前科并知行所等より出産之石炭之利合は、公儀之御益に相成候義に付、右御益金は御軍艦所之費用に充て行ひ候様罷成候は、御都合可然と奉存候

但、長崎・箱館港之義も、都て本文一樣に取計候様可仕奉存候

一 兵庫表之義は、時々御船々も相廻り、其外諸家蒸気船等も碇泊致し候場所に付、同所并今般製鉄器械所御取建可相成横須賀衰えも同様会所取建候積、尤積廻し方等之義は、前条同様に取計候様可仕奉存候

一 差向石炭会所可取建場所は前条申上候五ヶ所にて、右えは御軍艦奉行支配向之者为相詰、其他御国海岸便利之港見計、石炭置場補理、忖ヶ所え五、六拾万斤つゝ貯置候積を以前書石炭堀取候場所之内、可成丈道程近き方より積廻し、石炭所心付方等之義は其所之者え申付、御船々航海中は石炭欠乏及候は、其所え船を寄せ、積込方取計、置所之石炭貯少に相成候は、山元え申遣、追々積廻し候様取計候は、是迄之如く差掛り、港々等にて商人共より御買上致し候よりは御入用少にて御用弁宜敷義と奉存候

一 御料并知行所等石炭出産場所、地名等糺方之義は、御勘定奉行より支配御代官え相達、不洩様為所書出、尤最初より前条仕法之通、夫是一時手を下し候訳には無之、先御府内最寄より取懸り候積見分之者差遣し、山代并堀取運賃等、巨細吟味之上、御損益勘弁いたし、弥可被行と見居候は、遠に及し売捌方之義も是又見居も付候上は、先神奈川におゐて仮会所等にて可成丈約やかに手初いたし、売試、追々外場えも及し候積に御座候

右石炭之義、是迄之通之御仕法にては、蒸気御船等追々相殖御遣ひ方、盛に相成候に随ひ、日に增高直之石炭御買上致し候様罷成、御不益は申迄も無之、海軍所永続方にも拘り可申と存込候に付、私共一同評議之上、以後御仕法之義取調申上候、可然との御義に候は、急速御下知御座候様仕度奉存候、依之去々戌年中御軍艦奉行井上信濃守外忖人より相伺候書面之写為御見合相添、此段奉伺候、以上

丑正月